911.45
32
911.45-Mo82ウ
1200500756469

川柳博覧記

始

911.45
Mo.82
(F)

母袋未知庵著

川柳楠公記

書物展望社版
皇紀二千六百一年

911.45
Mo·82

川柳楠公記

西926
踊100

川柳楠公記　目次

前書き……（一）
楠木氏系譜の事并ニ菊水紋の事……（六）
多聞丸出生の事……（一三）
主上御夢の事并ニ正成參向の事……（一五）
菊水旗擧の事并ニ笠置落の事……（二三）
赤坂城軍の事……（二六）
恩地猿廻の事并ニ赤坂城奪還の事……（三四）
渡部橋合戰の事并ニ遠籌攻の事……（四〇）
未來記披見の事……（四五）
千劍破城軍の事……（四九）

正成鳳駕御迎の事……（七五）
建武中興の事并ニ尊氏謀叛の事……（七七）
泣男謀計の事并ニ尊氏西奔の事……（八四）
正成兵庫に下向の事附リ義貞と内侍の事……（一〇〇）
櫻井驛訣別の事……（一〇五）
湊川討死の事……（一一〇）
正行の事并ニ吉野朝廷の事……（一一七）
正儀の事附リ太平記の事……（一三〇）
湊川建碑の事并ニ湊川神社創建の事……（一三五）

目次畢

序

俳諧は連歌から出て滑稽を以てその特質とした。しかし俳諧の文藝的特性は實は滑稽にあるのではなくて、その通俗性に求めらるべきものであつた。芭蕉の俳諧は中世文藝の理念を通俗性の中に生かしたものに外ならない。川柳は俳諧から出て同じく滑稽の文藝と見なされた。けれども川柳の本質は必ずしも滑稽とすべきではなくて、むしろその大衆性こそ何より重視されねばならない。それは俳諧の通俗性が大衆的通念の下に、更に強化され一般化されたものである。例へば「百兩をほどけば人をしさらせる」といふのは、決して單なる滑稽の故に川柳とされるのではない。それが大衆的通念の共感によつて迎へられる所に、川柳としての特性が成立して居るのである。隨つて川柳には信濃者といへば大飯食ひ、十九といへば肺病娘といふやうな、一種の類型を生む傾向が強

い。この傾向は川柳を遂に陳套ならしめる虞れはあるが、實はそれだけ大衆の眞の聲がこゝに聞かれるのである。

母袋氏の『川柳楠公記』は曩に雜誌「古川柳研究」に連載されて、識者の注意を大に惹いたものである。今それが新たに補訂を加へられ、單行本として刊行の運びになるといふ。誠に喜ばしいことである。およそ我が國民であるかぎり、兒童走卒といへども大楠公の名を知らぬものはない。その誠忠無私の事蹟と精神とを傳へる典籍に至つては、恐らく汗牛充棟もたゞならぬものがあるであらう。けれどもそれらは多く學者文人の手になり、直に大衆の語る所を聞き得るものは極めて少い。その間にひとり雜俳川柳に描れた大楠公の姿こそは、大衆の僞らざる心から出たものであつた。大衆が如何にその誠忠を敬仰し、如何にその智勇を讃美したかは、本書一部を手にすればおのづから明かであらう。もとより學者文人の論考述作、楠氏の義を顯揚して皇國臣民の嚮ふべき道を示すに足る。しかしまた雜俳川柳の俗說俚語の間に、菊水の遺芳を千古に傳へるものが多くある事を忘れてはならない。母袋氏のこの著によつて、大楠公の精神は愈〻深く大衆の心に徹して行くであらう。今日の時局に際し、この好著を得たことを喜ぶあまり、思ふ所を記して序文とする。

昭和十六年十月

穎原退藏識

小引

一、本書は、昭和十年五月大楠公六百年大祭に際し、其の關係の某會より出版せらるゝ筈のものであつたが、故あつて刊行を中止し、昭和十四年八月より約一ヶ年雜誌「古川柳研究」に連載せるものである。

一、本書所收の雜俳川柳狂句五百餘章は『俳風柳多留』其他總て江戸期の柳書雜俳書より抄出せるもので、其の出所は各句の下に示して置いた。挿繪は兵庫縣御影「禾舟文庫」所藏の古刊本を影寫せるものである。

一、所收句には諄き註解を施さず、隨所短註と共に同趣の句を順列して、以て讀者の推解に俟つこととした。

一、本書編著に際し、故岡田三面子博士・故竹重虛心・梅本秋農屋・川島禾舟・頴原退藏諸先生並に大曲駒村氏の御厚配を仰ぐこと多大であつた。茲に厚く謝意を表し、故人の御冥福を祈る。

昭和十六年十一月中澣

著者

前書き

楠公の純忠至誠は爰に改めて呶々するを要せぬ。楠公の事蹟に就ては古來幾多の論纂があるが、公を顯彰して餘蘊なく、最も我等の心に適ふものは、彼の賴山陽が『日本外史』に說ける所であらう。

勤王の功は、余、楠氏を以て第一と爲す。楠氏微りせば、則ち西狩の駕、吾其の承久と一轍に歸して止みしを見んのみ。何ぞや。彼北條氏は政を失へりと雖も、其權力は更に甚だしき有り。累世の威を藉りて、積弱の餘に加へ、百萬の虎狼、其指呼に隨ひ、中國に咻氣して、之に攖る或る莫し。天下方に承久を以て戒と爲し、踵を重ね屏息して、敢て勤王の事を言ふもの莫し。而して楠公、獨り眇眇たる軀を以て、義を其間に唱へ、其衝路に當り、其爪牙

を挫きて、四方の義士の氣を鼓舞し、之をして一時に踵起せしめ、元惡を斧鉞の下に殄戮し、列聖の深仇を報い、累朝の大恥を雪ぎ、天下の萬姓、再び日月の光を仰ぐを得たり。皇運の泰に屬すと曰ふと雖も、而も公之が唱を爲すに非ずば、焉んぞ能く此に至らん。是れ焉んぞ、天斯人を生じて、世道を匡濟するに非ざるを知らんや。（中略）之を要するに、位、其器に滿たず、能く其才を展ぶる莫し。而も終に能く躬を以て國に殉じ、先王に靖獻す。餘烈の及ぶ所、獨り其子孫のみならず、公卿にまれ、將士にまれ、各弓箭を執りて、王事に勤むるは、概ね皆楠氏の風を聞きて起てる者也。嗚呼、楠氏の如きは、眞に武臣の名に愧ぢずと謂ふ可し。

楠公の事蹟に就て書かれた諸書を繙けば繙く程に、我等は其の崇高なる人格に打たれざるを得ない。唯に武人としてのみでなく、眞に人として間然する所なき人格を具へられた、絶對理想の國士であることを知るのである。

九郎判官を愛し赤穗義士と親んだ江戸時代の大衆が、同時に楠公を敬慕せることは、決して現代の我等に劣らなかつたものと思はれる。それはたゞ楠公の奇策縱横なる所に人氣が投じた所爲ばかりとは考へられない。我等は是を彼等大衆の謳ひ出せる川柳狂句に依つて窺はう。

楠に不足なものは運ばかり
湊川眞ッ直ぐに行く道しるべ

とは、よく楠公の人格と事蹟を知つてはじめて吐き得る句である。

楠をもう五六册生かしたい
草ひとつなき墓楠が

は、楠公に對する熱烈なる敬慕の表現に他ならない。楠家の臣志貴右衞門や安間入道了願の名を、今日幾人の人が知つてゐるであらうか。假令講釋師や俗書から得た知識にしても、江戸の大衆は、これを

湊川志貴たつあとに馬煙り
敵陣を揉みに揉んでは安間攻め

と、狂句にものしてゐる。或は又、

ぱつ〳〵と遣ひ尊氏物にする、

の句などは、立派な史眼を具へたものではなからうか。

敢て俗説を捨てず遊戯に亙れるものをも避けず、こゝに彼等の謳へる所を聽かんとするものである。

楠木氏系譜の事井ニ菊水紋の事

楠木氏の系譜は、楠公の死後足利幕府の手によつて、公の父の名さへ明かならぬ程に湮滅せられてしまつたが、楠木氏系圖として現在傳はつてゐる處の互に異同あるもの十數種の、其の殆ど總てが、敏達天皇の後胤井手左大臣橘諸兄の裔と記してゐる。即ち本姓は橘氏である。

○南朝の橘枳にはなるず　佃島住吉奉額

——「江南の橘江北の枳」、揚子江南の橘は、之を江北に移し植ゑれば枳殼に變ずといふ故事。

○橘の末世は楠の箸一本　柳多留一〇六

——正成・正行父子、或は正成・正季兄弟を云ふ。

○橘は和漢にかほる忠と孝　梅柳　二四

○忠孝の名は橘の唐大和　柳多留一二三

——「二十四孝」の中の陸績、未だ六歳の時、他所で橘の實を貰つたが、之を食はずして袂に入れた。幼き者には似合はぬ振舞と、其の譯を尋ねると、家に持ち歸つて母に與へたい爲めと答へた。人皆、いとけなき者の此の孝心に感じたといふ。

河内守橘成綱の時、樟樹を愛して「楠は諸木に勝れ、剛堅にして四時不凋、石と變じて不朽、是れ武夫の心なるべし」とて、門前に此木を植ゑ列ねた。そ

れより世人皆楠殿と呼び、自らも亦楠木河内守と名乘り、爾後代々楠木を氏としたのであるといふ。『本朝武家評林』『牛馬問』其他

○楠は旁の方の最負する　同　一二

——楠字の旁は南、即ち南朝。

○楠は旁の方へ御ゝ味方　同　四七

○楠は偏のない世にする氣なり　新編柳樽一二

——楠字の偏の無いのは、即ち南朝。

○和の智勇木偏の南鎭の西　柳多留一五〇

——鎭の西は、鎭西八郎爲朝。

○石に成る木は南朝の柱なり　同　七二

——楠の老木は化して石と成るといふ俗説がある。

『和漢三才圖會』楠、其木堅實耐水以造船、其根株經歲者變爲石。

『吉野拾遺物語』楠正行が墓所に、いかなる者の仕業にや有りけん、書きつけける、「くすの木の跡のしるしを來て見ればまことに石となりにけるかな」

○石になる木を南朝の骨　誹諧鶴　二〇

○南朝の礎になる木を召され　柳多留　九六

○南朝の石ずゑ動きなき苗字　同　五一

○楠といふ名も石になりけり　尙齒會

○一周忌あたり正成石になり　柳筥　四

○楠の葉武者は落ちて土に成り　柳多留　四九

○楠の忠義石よりなほ堅し　御嶽山奉額

○楠は堅い利益を世に殘し　柳多留　六六

○石になる木の精神を嗚呼と譽め　新編柳樽一〇

——「嗚呼忠臣楠子之墓」。

○世の虫を除けに南朝は樟の精　新柳樽　一

——樟腦は楠から採る。

○樟腦の出る木内裏の虫を除け　しげり柳

○樟腦になつても楠は内裏守護　柳多留一〇九

——雛人形の内裏様に、虫除けの樟腦を入れる。

○楠は藥にしても内裏守護　滑稽發句類題集

○楠が守護し四日に還幸し　——（文化五）

——三月四日には雛人形を仕舞ふ。

○楠よりも赤松長く世を保ち　新編柳樽一五

——赤松則村父子、後述。

○楠も柴も及ばぬ御名木　柳多留八一

——御名木は松平氏の松を指す。徳川家治世讃美の阿諛の句。

楠木氏の家紋「菊水」は、壽を言祝ぐ南陽酈縣菊水の故事から出たものであつて、其祖橘諸兄が山吹の花を愛し井手の玉川に浮べる一輪を寫して紋章としたのが、子孫に至つて何時か菊の花に變つたのであるといふ説もあるが、それは誤であらうと云はれる。また、後醍醐天皇が正成を召された時、御手づから菊花一輪を天盃に泛べて賜つたのに感激して、以て旗の紋としたといふのは、勿論憶説であるが、床しくも美はしい話である。公家武家の紋章數多ある中に是程世の人に知られ、敬慕せられてゐるものはあるまい。

○楠が平人ならばにやけた紋　新編柳樽一

○菊水を染めた日本の智恵袋　柳多留九一

○南朝を貢ぐも水に黄金草　梅柳七

——黄金草は菊の異名。

○菊水の流れ仕舞は湊川　柳多留一〇三

○三忠は菊水及び藤小松　同一六三

——藤は藤原藤房、小松は小松内府平重盛。

楠木氏系譜の事并ニ菊水紋の事

○藤の房散る頃菊の水をあげ　同　一三八

○菊の出る頃には藤の房は散り　柳の糸口

○智謀の源菊水と渭水なり　柳多留一三七

——渭水に釣して周文王の軍師となつた太公望呂尚。

○楠が紋を芝居へ連れて行き　万句合寶暦一三・義五

○楠の紋は座頭の芝居行き　柳多留　九三

——水に菊＝見ずに聞く、といふ駄酒落。

○菊水は菰ッかぶりに過ぎた紋　同　三八

○菊にかなはぬ樽底の三ッ鱗　新編柳樽二〇

——菰印に菊水をつけた銘酒と、△をつけた銘酒。三ッ鱗は北條氏の紋。

○新酒が交り菊水の味を消し　一安追福會

——新酒は、新田氏を暗示。

多聞丸出生の事

河内國金剛山の西に、千早・東條・赤坂等の七郷を領せる楠木正遠（或は正康とも正玄とも云ふ）は、長子が早世して後ち更に子が生まれなかつた。其妻はこれを嘆き、大和志貴山の多聞天に百日の間參つて、一夜靈夢を感じて身籠り、永仁二年秋八月、一男子を擧げた。多聞天の申し子なればとて多聞丸と名付く、卽ち長じて兵衞尉橘朝臣楠木正成となつたのである。多聞天は梵語毘沙門 Vaisravana の譯で、四天王中の一神として北州を守護する善神、川柳に「毘沙門は芥子の利いた顏ッつき」（柳多留拾遺三）「佛師屋も座像は知らぬ多聞天」（柳多留六六）などゝ詠まれてゐる。多聞丸とは福德圓滿の相を湛へた誠にめでたい名である。いま別格官幣社湊川神社の鎭座される神戸市多聞通の地名は、

これに因んで付けられたものである。

○本地は毘沙門垂跡は　多聞丸　柳多留　九二

——本地垂跡説の洒落。

○智仁勇授かり給ふ　多聞丸　同　六六

○毘沙門の化身で多門兵衛なり　万句合安永六・梅四

○申し子は智勇を兼ねしない子也　柳多留　六六

——楠子と男子の秀句。

○建武ころ南を守る　多聞天　新柳樽　一

——本來は北を護る神であるが。

○菊の紋多門の頃も小手が利き　柳多留　九二

——『本朝通鑑』正成幼にして顔異、辨説明析なり。六歳にして十二三歳の童と相撲してこれに勝ち、七歳にして勇力あり。正玄屢々八尾別當と隣を接して相戰ふ。時に正成十二歳、自ら敵一人を斬る。年已に長じて學を好み兵を論ず。正玄久しく八尾別當と地を爭ひ相戰ふ事歴年、或は正玄之を取り、或は八尾之を取る。正成十六歳に及ぶ比に至りて、悉く其地を取りて奪はれず。云々

主上御夢の事幷ニ正成參向の事

茲に人皇九十六代後醍醐天皇の御代、武臣北條氏政權を握つてより九代高時の時、承久の惡逆の後を受けて幕府の專横は益〻募り、朝廷の御衰微は愈〻甚しかつた。天皇は英邁の御資質に在はしまし、後鳥羽上皇の御志を繼がれて夙に朝權恢復に叡慮を回らし給ひ、日野資朝・同俊基等有爲の公家をして土岐頼兼・多治見國長等畿内東國の武士を誘はしめ、兵を擧げんと計り給ふたが、期未だ熟せず、正中元年秋、謀洩れて土岐多治見は打たれ、資朝は佐渡に流されたのであつた。史家の所謂正中の變である。

然れ共、天皇は御志を捨て給はず、皇子護良親王をして叡山・南都の僧徒を

なづけしめ、近畿諸國の武士をも誘ひ、再び討幕の御企を進められた。幕府は早くもこれを知り、元弘元年八月、大兵を發して京都に攻上ぼつた。天皇仍ち神器を奉じ藤原藤房等を隨へ、難を避けて笠置山に潛幸せられ、詔を下して勤皇の兵を募り給ふた。

『太平記』元弘元年八月二十七日、主上笠置へ臨幸成つて、本堂を皇居となさる。始一兩日の程は武威に恐れて、參り仕ふる人一人もなかりけるが、叡山東坂本の合戰に、六波羅勢うち負けぬと聞えければ、當寺の衆徒を始めて、近國の兵ども此處彼處より馳せ參る。されども未名ある武士、手勢百騎とも二百騎とも、打たせる大名は一人も參らず。此勢ばかりにては、皇居の警固如何あるべからんと、主上思召し煩はせ給ひて、少し御まどろみありける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大なる常盤木あり。綠の陰茂りて、南へ指したる枝殊に榮え蔓れり。其下に三公百官位に依つて列座す。南へ向きたる上座に、御座の疊を高く敷き、未座したる人はなし。主上御夢心地に、誰を設けんための座席やらんと、怪しく思召して、立たせ給ひたる處に、鬢結ひたる童子二人忽然として來つて、主上の御前に跪き、泪を袖にかけて、一天下の間に暫くも御身を隱さるべき所なし。但しあの樹の陰に南へ向へる座席あり。是御ために設たる玉扆にて候へば、暫くこれに御坐候へと申して、童子は遙の天に上り去りぬと御覽じて、御夢はやがて覺めにけり。主上是は天の朕に告ぐる所の夢なりと思召して、文字につきて御料簡あるに、木に南と書きたるは楠といふ字なり。其陰に南へ向うて座せよと、二人の童子の敎へつるは、朕再び南面の德を治めて、天下の士を朝せしめんずる處を、日光月光の示されけるよと、自ら御夢を合せられて、たのもしくこそ思召されけれ。夜明けゝれば當寺の衆徒、成就房の律師を召され、若し此邊に楠と云はるゝ武士や有ると、御尋ありければ、近きあたりに、左樣の名字つ

きたる者ありとも未承り及ばず候、河内國金剛山の西にこそ、楠多門兵衛正成とて、弓矢取つて名を得たる者は候ふなれ。是は敏達天皇四代の孫井手左大臣橘諸兄公の後胤たりといへども、民間に下つて年久し。其母若かりし時志貴の毘沙門に百日詣で、夢想を感じて設けたる子にて候ふとて、稚名を多門とは申し候ふなりとぞ答へ申しける。

○正夢を後醍醐帝は御覽じる　柳多留　四三

主上、さては今夜の夢の告是なりと思召して、頓て是を召せと仰下されければ、藤房卿勅を奉りて、急ぎ楠正成をぞ召されける。

○御夢やぶれて楠を召す　誹諧鶴　二二

○御吉夢にまかせ南の木へ勅使　御島住吉社奉額

○楠へ勅使しら〳〵明けに立ち　万句合明和二・仁一

――夜の明け方に。

勅使宣旨を帶して、楠が館へ行き向うて、事の仔細を演べられければ、正成、弓矢とる身の面目、何事か是に過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先づ忍びて笠置へぞ參じける。

○南朝へ枝葉もかたく參内し　柳多留拾遺六

――此時未だ南北朝に分れず。

主上萬里小路中納言藤房卿を以て仰せられけるは、東夷征伐の事、正成を憑み思しめさるゝ仔細あつて、勅使を立てらるゝ處に、時刻を移

正德六年刊「楠一生記」所載

主上御夢の事幷ニ正成參内の事

さず馳せ參る條、叡感淺からざる處なり。抑天下草創の事、如何なる謀を廻してか、勝つ事を一時に決して太平を四海に致さるべき、所存を殘さず申すべしと、勅定ありければ、正成畏つて申しけるは、東夷近日の大逆、唯天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘つて天誅を致されんに、何の仔細か候ふべき。但天下草創の功は、武略と智謀との二にて候、若し勢を合せて戰はゞ、六十餘州の兵を集めて武藏相模の兩國に對すとも、勝つ事を得がたし。若し謀を以て爭はゞ、東夷の武力唯利を摧き堅を破る內を出でず。是欺くに易くして、怖るゝに足らざる所なり。合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人未生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へと賴もしげに申して、正成は河內に歸りにけり。

○楠公を杖と笠置の詔　新柳樽　一

——杖と笠の緣語。

○楠木は實に礎と重き御意　梅柳　八

○みんなみへ差出た枝で防ぐなり　万句合安永四・宮二

○名木を後醍醐帝は一本持ち　同　天明三・滿一

○笠置から根繼にしたり南の木　和國追福會

○土臺は楠で大塔を眞ンに立て　一安追善會

——大塔宮護良親王。

○笠置の御夢三代に戴かせ　新柳樽　一

——正成・正行・正儀の三代。

○龍に翅は勇將に靈夢の矢　入舟狂句合

○御歎息朽ちぬ南柯の夢の德　しげり柳

——「南柯夢」の故事を利かす。

○南柯の御計夢世の疲に治す聖慮　三箱追福會

主上御夢の事幷ニ正成參向の事

——正成召見の爲め、御夢に托して御計畫を回らし給ふたのであると、長れ多き憶測をした句。

○菊水を夢で掘らせる智の深さ　柳多留一一二

——一說には、先に日野俊基が山伏となつて諸國に勤皇の士を求めし時、正成御味方の事を約して、自ら俊基にこの夢想の計を授けたのであると云ふ。『楠廷尉祕鑑』其他

○菊と水とんだ所から掘り出させ　同　九一

○南朝の菊は智恵からすぐり出し　同　一〇二

○御聖君今は御夢の告げもなし　同　一〇二

——德川家治世讃美の阿諛。

菊水旗擧の事幷ニ笠置落の事

正成は叡旨を奉じて河内に歸り、己が館の上なる赤坂山に城郭を構へて、笠置の行在に急あらば直ちに乘輿を迎へ奉る用意を調へ、菊水に「非理法權天」と大書した旌旗を颯爽と飜へした。勤皇義旗の第一である。

○譽れさは利運の一字旗に付け　柳多留　九六

——「非理法權天」の理を利に誤つた句。

○赤坂へ河内木綿の旗を立て　同　九六

——河内は木綿の產地。

○智仁勇河内木綿の三筋立　同　一四四

○菊水の旗逆水を切落し　新柳樽　一

笠置は幾程もなくして全く賊軍に圍まれ、味方よく奮戰して大軍を支へたが遂に風雨の夜、城中に潛入せる賊兵に火を放たれ、餘燼行在所にも及ぶに至つた。

『太平記』主上を始め進らせて、宮々卿相雲客、皆步跣なる體にて、いづくを指すともなく足に任せて落ち行き給ふ。（中略）後には只藤房季房二人より

外は、主上の御手を引き進らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そこともの知らず、迷ひ出させ給ひける、御有様こそあさましけれ。如何にもして、夜の内に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、

○金剛を杖に諸卿も笠置落　柳多留一三四

——金剛杖、金剛山下の正成を頼りに。

假にも未習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止まり、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて羅穀の御袖をほしあへず。兎角して夜晝三日に、山城の多賀郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。（中略）梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞召して、木陰に立ち寄らせ給ひたれば、下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしよりあめが下には隠れがもなし

藤房卿泪をおさへて、

いかにせんたのむ陰とて立ちよればなほ袖ぬらす松の下露　しげり柳

○袞龍も雨を催ほす笠置落　柳多留一六三

——袞龍は天子の御衣のこと。

○笠置落諸卿も袖に一ト時雨　同　八一

○たのむ木のもと雨のもる笠置山　同　八一

○木の間洩る月も召したる笠置山　同　八一

○御不運さ笠置で雨を凌ぎかね　同　五二

嬲て賊徒の一隊は主上を探し出し、怪しげなる張輿に載せ參らせて、南都の内山に入れ奉つた。

赤坂の城軍の事

笠置攻に西上せる大佛貞直・足利高氏等の關東の大軍は、まだ近江國へも入らぬ中に笠置が落ちたので、其儘赤坂城に向つて殺倒した。兵數凡そ三十萬である。

城は方二町ばかり、東一方は山、三面は平地で、僅かに塀一重を塗り、其の中に櫓を二三十も並べただけの急造のもの、守兵は僅かに五百人である。東國勢がこれを望み見て、「あな哀れの敵の有樣や、此城我等が片手に載せて、投ぐるとも投げつべし」と思つたのも、無理からぬ事であつた。

『太平記』正成は元來籌を帷幄の中にめぐらし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ、

○腕づくを河内先生嫌ひなり　　万句合明和五・龜一

豫め手兵五百人の中、二百人の究竟の射手を城中に籠め、殘り三百人を弟正季と一族和田正遠に預けて城の側の山中に隱して置いた。寄手は只一揉みと城塀に迫れば、城中からは亂射雨の如く注ぎ忽ち殺傷さるゝ者千餘人に及んだ。案に相違した寄手は攻口を少し引退き、甲冑を脱ぎ鞍を解いて休んでゐるところへ、三百餘の伏勢が二手に分れて、「東西の山の木陰より、菊水の旗二旒松の嵐に吹き靡かせ」吶喊をつくつて押寄せた。城中からも三つの木戸を颯と開いて二百の兵が鋒を揃へて打つて出で、三方から合擊する。

『太平記』寄手さしもの大勢なれども、僅の敵に驚き騷いで、或は維げる馬に乘つてあふれども進まず。或は弛せる弓に矢をはげて射んとすれども射られず。物具一領に二三人取りつき、我がよ人のよと引き合ひける其間に、主打たるれども從者は知らず、親打たるれども子は助けず、蜘の子を散らすが

如く、石川河原へ引き退く。其道五十町が間、馬物具の捨てたること足の蹈所もなかりければ、東條一郡の者どもは、俄に徳ついてぞ見えたりける。

○赤坂の寄手智略で追ヒ戻し　柳多留一一四

○楠に歩三兵にてなぶられる　柳多留拾遺五

——將棊の歩三兵に擬す。

○白旗の菊水敵を迷はせる　新柳樽一

——『楠廷尉秘鑑』に依れば、此時の伏兵は、

「三百餘騎を二手に分け、時刻よしと思ひければ、東西の山陰木かげより、無紋の白旗二流松の嵐吹靡かせ、しづかに馬を歩ませ、煙嵐をまいて押寄せたり。東西の勢是を見て、敵か味方かとためらふ内、云々」とある。

次の日、寄手は、十萬餘騎を後の山へ向けて伏兵に備へ、二十萬騎を以て再び城を圍んだ。此度は城中よりは矢一つ射出さず、更に人なきが如くである。寄手はいよ〳〵氣に乘つて、四方の塀に手をかけて上り越えんとした。ところが、豫て城塀を二重に造り、外の塀をば切落せるやうに工んで置いたので、城の中から四方の釣縄を一時に切放すと、寄手は皆堀の中に轉げ落ち、其處へ大石や巨木を投げ掛けられて、壓殺さるゝもの七百餘人に及んだ。

「楠一生記」所載

○釣塀の壁は工夫を練ッて塗り　入舟狂句合

○釣塀の奇計智略の放レ業　御嶽山泰額

○飛び立つて左兵衛も笑ふ千鳥塀　柳多留一六六

――後述の泣男左兵衛。後世講釋師は、この釣塀を「千鳥塀」と名付けた。

○和漢の智人塀を釣り運を釣り　布引會

――運を釣つたのは太公望。

四五日後、寄手は前の釣塀に懲りて直ぐに塀には取着かず、塀の中に下り立つて、鐵の熊手を引懸けてしきりに塀を引つ張つた。今にも引き破られさうに見えた時、城の中から柄の一二丈もある長柄杓で、熱湯の湧き返つたのを降注げば、寄手は堪へ兼ねて見苦しくもぱつと引く。矢庭に死ぬ者こそ無けれ、燒け爛れて倒れ伏す者二三百人に及んだ。

○湧く程な敵も熱湯には恐れ　新編柳樽一八

○千早勢着込の虱にも煮え湯　同　三〇

――城兵は序に虱退治をする。此句は、熱湯の計を後の千早籠城の時の事と誤つたもの。

攻め倦むだ寄手は、城の糧道と水の手を斷ち、己が陣々に櫓をかき逆茂木を引いて、遠攻の持久策を取つた。そこで正成は兵に命じて、白米を以て水に擬し、軍馬の足を洗ふ眞似をなさしめて敵を欺き、未だ城中は水に窮せざる態を裝つた。――この事正史には見えぬ。後世作れるところの傳說であらう。

○城中の水切れ馬で米をとぎ　柳多留一三六

○はかる敵馬の罘湯にしらげ米　神田御社奉額

○水でなし湯でなし罘に馬不審　柳多留一六六

○城中の九死は米を水に見せ　同　一一九

○僞セ物の水とは敵も氣が附かず　同　九八

○馬洗ふ米とは敵も量りかね　梅柳別一四

○馬盥の米で寄手を計るなり　柳多留九二

○馬盥の米は軍慮の智恵をとぎ　新編柳樽二六

○馬洗ふ米楠が智恵の水　柳多留一二四
○楠が敵を醉はせる米の水　同　一三九
○米で馬洗はぬ御代の穩かさ　同　四五

――御治世讃美の阿諛。

然しながら、もとより此城は急に構へた事であつて、兵粮も充分には用意して居らぬ。城が圍まれてから二十日餘り、今は四五日の糧を殘すのみである。『太平記』かゝりければ、正成諸卒に向つて云ひけるは、此間數箇度の合戰に打ち勝つて、敵を亡す事數を知らずといへども、敵大勢なれば敢て物の數ともせず、城中既に食盡きて援の兵なし。元來天下の士卒に先立つて、草創の功を志とする上は、節に當り義に臨んでは、命を惜むべきにあらず。然りといへども事に臨んで恐れ、謀を好んでなすは勇士のする所なり。されば暫く此城を落ちて、正成自害したる體を敵に知らせんと思ふなり。其故は正成自害したりと見及ばゝ、東國勢定めて悅をなして下向すべし。下らば正成打つて出で、又上らば深山に引き入り、四五度が程東國勢を惱したらんになどか退屈せざらん。是身を全うして敵を亡す計略なり。面々如何計ひ給ふといひければ、諸人皆然るべしとぞ同じける。

そこで城中に深さ二丈ばかりの大きな穴を掘り、中に二三十人の死骸を入れた上に炭や薪を積み、風雨の夜、一兵を止めて城兵は三々五々寄手に紛れて城を拔け出でた。城兵が皆落ち延びた頃、殘れる一兵は薪に火を掛けた。寄手はすはや城が落ちたりと大騷動である。火が鎭まつて後ち城中を見ると、穴の中に炭を積んで其下に多くの死骸がある。「あな哀れや正成はや自害をしてけり。敵ながらも弓矢取つて尋常に死にたる者かな」と、譽めぬ者こそなかつた。

○淺からぬ軍慮で敵を落す穴　ことたま柳

東國勢は、紀州の湯淺孫六に城を守らしめて、兵を引上げた。此時正成は金

剛山に身を潜めたのであつた。

○楠死んで火の消える山　誹諧鶴二三

○橘の柱が消えて嬉しがり　——

天皇を宇治の平等院に、次いで京都六波羅に幽し奉つた幕府は、越えて元弘二年二月、遂に畏くも車駕を遙かに隱岐國に遷し奉るに至つた。誠に御痛はしくも畏れ多き極みである。資朝・俊基は斬られ、藤房はじめ多くの公家達も諸所に流された。

恩地猿廻の事幷ニ赤坂城奪還の事

天皇隱岐に遷され給うて後は、護良親王も正成も共に金剛山に隱れて、官軍は暫く鳴を潜めてゐたが、其年元弘二年の夏に入る頃、正成は密かに赤坂城の恢復にかゝつた。

茲に楠家の老臣恩地左近は、曾て楠家の家法を破り正成に勘當を受けてゐる早瀨右衞門といふ士に、一つの功を立てさせて歸參を願はしめんと、領内富田林に世を忍べる右衞門の許を訪れた。右衞門今は猿廻を稼業としてゐたので、これ究竟の事と喜び、兩人して赤坂城の樣子を探らんと計つたのである。

『楠廷尉祕鑑』すでに其夜も明ければ、兩人は朝飯を仕廻ひ猿廻しの裝束を着し、早瀨は小猿を肩に負ひ裝束入し風呂敷並に杖を取て先に立ち、左近は米袋を脊負ひ古き太鼓を持て、赤坂さして赴きけり。

○猿曳の唄を恩地は急稽古　柳多留七八、誹諧鶴二六

○地謠を御出しなさるな恩地殿　柳多留一五〇

——謠曲の癖が出て右衞門に叱られる。

○猿舞は敵の樂屋を見に這入り　新編柳樽三二

寛政十一年刊「繪本補公記」所載

○是も縁猿曳になる廻はし人　同　三二

扨二人は城近くなれば、城下に大なる陣小屋を立て番人二十人ばかり居たる所へ、早瀬はかの小猿を追ひ放せば、猿は仕込みし事なればひよこ〳〵立て馳せ廻る。番人これを見て大に笑を催し興をなす。其時早瀬は猿廻しを唄ひければ、跡に控へし恩地は太鼓を打ち夫れより裝束を改めて種々様々の藝を盡し、番人共は小猿の愛らしく身振をするを見て、高笑ひして興じける。此音に城中より、若侍我も〳〵と出來りて見物しければ、早瀬は音曲をよくすれば恩地は太鼓をうつて是を囃す。見物の軍兵共魂をぬかし餘念なかりけり。扨城中より急ぎ此方に呼び來るべしと有ければ、（中略）案内にしたがひ城内にぞ入りにけり。（下略）

○謠の交ぢる猿唄に氣がつかず　同　一一

○猿唄で恩地は敵をころりさせ　柳多留八一

○とは知らず日々に恩地の來るを待ち　同　一五七

○又あろかいな敵陣へ猿廻　柳の糸口

――「さんな、またあろかいな」、猿廻の囃し。

○序に備へも見てたもれ恩地殿　柳多留一六六

――淨瑠璃『近頃河原達引』猿廻與次郎の臺詞「ついでに日和も見てたもれ、云々」を振つたもの。

○序に備へを見て戻る恩地なり　同　八七

恩地猿廻の事ニ并赤坂城奪還の事

○序に兵粮も見て歸る恩地が智　しげり柳

○犬になる恩地は敵へ猿を連れ　梅柳　六

——「犬と猿」の緣語。犬は間者の意。

○猿廻し敵も犬とは氣がつかず　新編柳樽二七

○犬と成つても尾は見せぬ猿廻　しげり柳

——化の皮がはげない。

○犬といふ尻ッ尾は見せぬ猿廻　眞砂會

○白い齒を恩地の猿に見透かされ　柳樽　一五一

——猿の白い齒を白米に擬したるもの、兵粮の意。

○猿若へ賜ふ恩地も武家の跡　新編柳樽一一

——天保十三年、江戸二丁町の芝居が淺草山ノ宿小出家の屋敷跡に轉地を命ぜられ、町名を猿若町と改めた事を、恩地の猿廻に云ひ掛けて詠める句。

赤坂城を守れる湯淺孫六が、己が所領紀州より人夫五六百人に兵粮を運ばせ、夜中ひそかに城中に擔ぎ入れんとしてゐるといふ報牒を受けて、正成は、手兵五百人を以て途中にこれを奪取つた。そしてその俵の中に武具を入れ、兵三百人を人夫の如くに裝ひ擔がしめ、殘りの二百人がこれを追擊するやうな眞似をなさしめた。城中の湯淺はこれを望み見て、己が人夫達が敵勢に追はれてゐるものと思ひ、門を開いてこれを城中に入れた。人夫に裝つた楠木勢は忽ち俵の中の甲冑を着けて鬨の聲を揚げる、同時に城外からも木戸を破り塀を越えて攻め入る。內外呼應して攻立てられて、湯淺は遂に首を伸べて降人となつたのであつた。

○兵粮は敵に喰はせた御智略　柳多留　九七

○橘の氏に恩地は左近なり　同　九二

——左近櫻、右近橘。

○につこともせず語り合ふ和田恩地　誹諧寶の帖

恩地猿廻の事并ニ赤坂城奪還の事

川柳楠公記

——和田氏は楠木氏の支族で、楠木氏の亡ぶまで一族共に勤皇の事に從つた。其の家紋も同じく菊水を用ゐた。

○敵陣を揉みに揉んでは安間攻め　柳多留一〇八

○安間一ト揉み敵陣を打破り　同　一三六

——此二句序に此處に挿入。楠家の老臣安間入道了願。安間と按摩の秀句。

渡部橋合戰の事幷ニ遠籌攻の事

正成は、湯淺の兵を合せ七百人の軍勢を率ゐて河内和泉兩國を悉く靡かせ、進んで攝津國渡部橋に屯した。すでに其時その勢は二千人となつてゐた。

主上を隱岐に遷し參らせてより、天下また虞るに足るなしとせし京都六波羅の北條仲時・同時益の兩將は、正成起ると聞いて驚く事一方ならず、隅田通治・高橋宗康の兩人に兵五千を授けて、これに向はしめた。

『大日本史』正成、二千人を分ちて三となし、天王寺の側に伏せしめ、弱卒三百、橋を守るに、皆羸馬繩轡にして、戰ふに及び、輒ち走り、賊を誘ひて窮追せしむ。天王寺を過ぐる比ひ、伏兵並び起りしかば、賊、大に敗れて走り、爭ひて橋を渡るに、溺死するもの、算なし。

『太平記』しかれば五千餘騎の兵共、殘少なに打ちなされて、這々京へぞ上りける。

「楠一生記」所載

渡部橋合戰の事幷ニ遠籌攻の事

○盆莫蓙へ隅田高橋はぶつ返り　柳多留　二

——京に留守せる兵共が、盆莫蓙を敷いて博奕の最中へ、兩將逃げのびて轉げ込む。

其翌日に何者かしたりけん、六條河原に高札を立て、一首の歌をぞ書きたりける。

渡部の水いかばかりはやければ高橋落ちて隅田ながるらん

京童の癖なれば、此落書を歌に作つてうたひ、或は語り傳へて笑ひける間隅田高橋面目を失ひ、且くは出仕を止め、虚病してぞ居たりける。

○逃げのびて隅田高橋はたてくだし　万句合明和三・櫻六

——たてくだしは烈しい下痢のこと。川に落ちて水を呑んだり冷したりしたので、きつと腹下しをした事だらうといふ穿。

續いて六波羅では、宇都宮公綱を將とし、紀清兩黨の五百騎をして、天王寺に陣せる正成に向はしめた。

『大日本史』和田孫三郎、正成に謂て曰く、隅田・高橋が五千の兵は、我、已に之を破れり。此の新勝に乘じて、以て公綱を拉がんは何の難きことかあらん。請ふ、兵を出して逆へ擊たんと。正成曰く、兵は和に在りて多に在らず。公綱は坂東の驍將にして、從ふるに紀清の兩黨を以てせり。且つ、彼、敗衂の餘を承けて、僑軍孤進するは、志、必死に在らん。我、能く之を拒ぐとも、亡ふ所も、亦多からん。天下の事、豈に今日に止らんや。宜しく士力を愛みて、以て後擧を圖るべし。我、今彼に一籌を輸して引き退き、數日にして、奇を出して之を詐かば、則ち坂東慄急の士も、氣索きて去らん。所謂小敵を見て怯れ大敵を見て勇み、戰はずして人の兵を屈するものなりと。陣を棄てゝ郤く。

宇都宮は戰はずして一勝を得たるが如く、天王寺に陣取つたが、續いて敵陣へ攻入るには餘りに無勢であるし、さりとて只一戰も交へずして引返す事もならず、進退谷つてゐた。

四五日後ち、正成は攝津河内兩國の野伏共數千人を驅り集め、これに兵三百を添へ、夜に入つて遠く天王寺を取り卷く山々で篝火を焚かしめた。實に幾萬の軍勢が屯せるが如く見える。斯くの如くすること數夜、篝火の數は益々增し其勢ひは愈々逼る。流石勇猛なる宇都宮の軍勢も、これには全く氣疲れ力弛んで、遂に京都に引上げてしまつた。入れ替つてまた楠木勢は陣を布いたのであつた。

○篝火に釣られ公綱あつくなり　一安追善會
○ぽつ〳〵と公綱怒る篝攻め　しげり柳
○公綱が胸篝火と共に燃え　新編柳樽一五
○遠篝軍慮にうとき敵を釣り　同　三二
○楠と持になるやうな宇都宮　万句合天明二・松三

――圍碁の持に擬す。
『太平記』誠に宇都宮と楠と相戰ひて勝負を決せば、兩虎二龍の戰となつて、何れも死を共にすべし。されば互に是を思ひけるにや、一度は楠引いて謀を千里の外に運し、一度は宇都宮退いて、名を一戰の後に失はず。是皆智謀深く、慮遠き良將なりし故なりと、譽めぬ人もなかりけり。

○遠篝北は煙たき南風　一安追善會

――南北朝を利かせたる句。

正成は天王寺に屯して軍中に令して民家を暴掠する事を禁じ、士卒を厚く遇したので、遠近より心を寄せて歸屬する者多く、其勢ひは漸く强大となり、威を京畿に振ふに至つた。

未來記披見の事

天王寺には『未來記』と云ふ、聖德太子が末世代々の王業と天下の治亂を豫言せられたる讖文が祕藏されてゐた。

○未來記も過去帳もある天王寺

『大日本史』正成、復天王寺に入り、寺僧に請ひて、上宮太子の未來記を見る。其の文に曰く、

當人王九十五代、天下一亂而主不安、此時東魚來呑四海、日沒西天三百七十餘日、西鳥來食東魚、海内歸一、

正成、悅びて曰く、讖文の所謂人王九十五代は、卽ち今上なり。東魚四海を呑むとは、相模入道是なり。西鳥東魚を食ふとは、當に兵を起して關東を滅すものあるべきなり。日西天に沒すること三百七十餘日とは、上の隱岐に在すを指すなり。闕に歸りて正に反らんは、當に明年の春に在るべしと。

楠一生記所載

陀羅尼追善會

○生臭い事未來記に書かれたり　柳多留拾遺五

——魚だの鳥だのと。

○未來記で見れば高時さかな也　柳多留　一九

○入道を東魚は蛸の見立なり　同　一八

——相模入道を東魚と云つたのは、蛸入道に見立てたもの。

○相模入道の俳名東魚なり　同　二〇

——俳名は、今のペン・ネームの如きもの。

○東魚でセなどゝ天狗を囃すなり　柳筥　四

——高時いたく田樂を好み、或る夜酔うて立舞ふ所へ、十人餘りの田樂法師が忽然と現はれ共に囃し舞うたが、後に氣が付くと、それは異形の天狗共であつたといふ。

○聞けがしに東魚喰ふを高く讀み　万句合明和元・義四

——俗書の說く所もとより遽に信ずべからざれども、此句以下九句は、次の說に據りて詠まれたるものである。

『三楠實錄』　正成思ひらく、將の兵を用るには衆の心を勇むるにはしかじ、所詮上宮太子の未來記に名を借て文を作りなば、總じては信を勸むるの術ともなり、別しては大なる謀に成りなんと思ひついて、天王寺に參詣し、當寺の一舍利法印に密談して、一卷の書を書調へ、密に寶藏に納めて、己後取出して上宮太子の未來記なりとて、甥の和田正遠に密に是を拜ませけり。和田是を拜して後、老軍に拜ませんとて齎する事三日にして、老軍八人に見せしむ。諸人喜びの餘り涙を流し、行末の軍實に賴母しく候とて、思ひ〳〵に此文を書寫して、密々に齎する事二日三日にして是を拜ませしかば、喜びをなさずといふ事なし。是故に、心の不定なる者も有りしかども、今は權者の未來記をし置かせ給ふ上は、何の疑か有らんやとて、皆正成に思ひ付てけり。又正成に心を通ぜざる者も是を聞及んでは、武家の滅亡遠きにあらずとて、王家に心を通じけり。實に遲しき智謀とぞ見へし。

○軍中しんと未來記の說をきゝ　和國追福會

○未來記は現世にふかき謀り事　柳多留　七八

○未來記を見たは現在はかり事　同　八九

○未來記は現在敵を討つ工夫　同　一〇五

○修羅の巷の未來記も無量の智　入舟狂句合

○未來記の智惠は佛意の上を行き　柳多留　三六

○未來記は佛家で知らぬ武の濟度　同　一六一

○智識も知らぬ未來記は武の濟度　新柳樽　五

○未來記の仕舞いろはを譽めて置　柳多留　二八

——未來記の終の方には、忠臣藏の事も書いてあるだらうと云ふ憶測。

千劍破城軍の事

此時に當り、大和十津川に隱れ在はせし護良親王は、兵を起して吉野に據り、

給ひ、赤松則村は親王の令旨を奉じて播磨に義兵を擧げた。飛報交々鎌倉に至るや、高時は東海・東山・北陸三道に檄して大いに兵を發し、阿曾時治・大佛高直・二階堂貞藤等をこれに將として西上せしめた。

正成は天王寺から金剛山に歸り、千劍破に城を築いて自ら是に據り、平野將監をして赤坂城を守らしめた。

明けて元弘三年春、東國勢は三軍に分れて、先づ吉野へ貞藤、赤坂へ時治、千劍破へは高直の軍が向つたが、幾日も過ぎずして吉野・赤坂は陷り、親王は高野山に落ち給ひ平野は斬られた。而して吉野・赤坂を攻落した兩軍も亦千劍破攻の勢に合し、更にまた近畿中國より是に加はる兵もあつて、其數無慮百萬と云はれた。

千劍破城は、金剛山の西腹に在つて、南北は峯に續き東西は谷に臨んで、高さ二町ばかり、廻りは一里にも足らぬ小城で、守兵は僅かに千餘である。敵勢は小城と侮つて、

『太平記』初一兩日の程は向陣をも取らず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊まで、かづきつれてぞ上りたりける。城中の者共少しもさわがず、靜まりかへつて、高櫓のうへより大石を投懸け〳〵、楯の板を微塵に打碎いて、漂ふ處を差つめ〳〵射ける間、四方の坂よりころび落ち、落重つて手を負ひ、死をいたす者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衞門尉、軍奉行にてありければ、手負死人の實檢をしけるに、執筆十二人、夜晝三日が間、筆をも置かず註せり。

○泣き聲も交る千早の關の聲

新柳樽　一

——後述の泣男左兵衞。

○千早城安間猿曳泣男

新編柳樽一五

——按摩に猿曳に泣男と、變つた者が籠つてゐた。

さてこそ、今より後は、大將の御許なくして、合戰したらんずる輩をば、却つて罪科に行はるべしと觸れられければ、軍勢暫く軍を止めて、先づ己が陣々をぞ構へける。

寄手は、この纔かな山の嶺の小城の事なれば、用水は夜々東の溪から汲上げるのであらうと推測して、その場所を名越越前守の三千騎に守らしめた。然るに、城中には五つの泉があつて毎日水五石を得る上に、なほ不足を慮り大桶を二三百も造つて水を貯へ、雨降れば屋根の雨垂を受けて補ふやうにして、五六十日の旱が續くとも更に困らぬやうに備へてあつた。名越の兵は今や〳〵と毎夜氣を詰めて待構へてゐたが、更に城兵が現れぬので、漸く弛み怠つて來た。正成はこれを見澄して、夜に紛れて二三百人の兵を出し、明方これを擊つて走らせ、その旗幕を奪取つた。

『太平記』　其翌日城の大手に、三本傘の紋書きたる旗と、同じき紋の幕とを引きて、是こそ皆名越殿より賜つて候ひつる御旗にて候へば、御紋附きて候間、他人の爲には無用に候。御内の人々是へ御入り候ひて、召され候へかしと云つて、同音にどつと笑ひければ、天下の武士共是れを見て、あはれ名越殿の不覺やと、口々に云はれぬ者こそなかりけれ。

○リウフルで寄手をなぶる千早城　柳の糸口

――ルウフル（蘭語 Roffle 訛つてリウフル、ヅウフル、ヅウフラなどとも云）は、吹矢の筒に似たもので、遠くへ聲を傳へるに用ふる具、今のメガフオンの如きもの。

名越一族は愧ぢ忿つて、兵五千を率ゐて城の逆茂木一重を引破り、切岸の下まで詰寄せたが涯嶮しくて上り得ず、唯徒らに城を睨むばかりであつた。ところへ城中から、豫て切岸の上に横たへて置いた大木を切つて落せば、將棋倒に四五百人壓潰ぶされて、しどろになつて騷ぐところを、思ふさまに射倒され、『太平記』五千餘人の兵共殘らずくなに討たれて、其日の軍は果てにけり。

誠に志の程は猛けれども、唯仕出したる事もなくて、若干討れにければ、あはれ恥の上の損かなと、諸人口遊は猶止まず。　万句合安永五・智一

○珍らしく千早へ寄せて馬鹿にされ　柳多留九、同拾遺五

尋常ならぬ合戰の體を見て、寄手も侮りにくゝや思ひけん、今は始のやうに勇み進んで攻めんとする者もなかりけり。

○古狸めがと千早の寄手いひ

寄手は最早攻め倦み、力攻を諦めて兵糧攻の持久策に移り、碁・双六・百服茶・歌合等に日夜鬱を散じて、更に攻寄せやうとはしなかつた。城兵もこれには全く困うじ果てゝ來た。

『太平記』　正成いでさらば、又寄手をたばかりて、居眠さまさんとて、芥を以て人長に人形を二三十作つて、甲冑をきせ兵仗を持せて、

○百萬の案山子一夜の藁細工　柳多留　九〇

○軍勢を藁で束ねて竹の串　同　八一

○楠は武者をすぐつて束ねさせ　新編柳樽　五

——藁をすぐつて。

○あすの朝いるのと千早藁細工　柳多留　九〇

——要ると射るの秀句。

○楠は捨案山子まで召し抱え　新柳樽　一

○兵粮の売を楠武者にする　柳多留四二、同一三九

○楠家の奇兵甲冑に袴なり　同　九九

——稲藁の葉鞘を俗に袴といふ。

○楠は其餘りでも武者草鞋　同　八九

○正成はあとで草鞋にしろと下知　同八一、同八四

○正成は鎧を着せて可笑しがり　万句合明和二・禮四

夜中に城の麓に立置き、前に疊楯をつき雙べ、

○千早の折助人形をさし擔ひ　梅柳　七

――折助は、中間の異稱。

○正成は立てかけて見て可笑しがり　柳多留拾遺五

其後にすぐりたる兵五百人を交へて夜のほの〴〵と明けゝる霧の下より、同時に関をどつと作る。四方の寄手関の聲を聞いて、すはや城の中より打ち出でたるは、是こそ敵の運の盡くる處の死狂よとて、我先にとぞ攻合せける。

○藁武者と知らず矢種を霧の雨　柳多留　八三

城の兵かねて巧みたる事なれば、矢軍ちとするやうにして大勢相近づけて、人形ばかりを木がくれに殘置いて、兵は皆次第々々に城の上へ引きのぼる。寄手人形を實の兵ぞと心得て、是を打たんと相集る。正成所存の如く、敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつと發す。一所に集りたる敵三百餘人、矢庭に討殺され、半死半生の者五百餘人に及べり。軍はてゝ是を見れば、あはれ大剛のもの哉と覺えて、一足も引かざりつる兵、皆人にはあらで藁にて作れる人形なり。

○諸軍勢藁だ〳〵と後で云ひ　幸々評万句合

○軍勢は藁で束ねた男なり　万句合安永六・義三

○藁で束ねた武士を出すひどい事　同　安永四・智四

○大敵が千早で藁に化かされる　柳多留　七九

○卷藁へ具足を着せて馬鹿にする　同　二二

――弓の稽古の卷藁のやうなもの。

○戰場で卷藁を射る馬鹿な事　万句合天明元・鶴二

○正成は草鞋にしろと引ッ崩し　露丸評万句合（明和三）

是を討たんと相集りて、石に打れ矢に當つて死せるも高名ならず、又是を危

みて進み得ざりつるも臆病の程顯れていふかひなし。唯兎にも角にも萬人の物笑ひとぞなりにける。

○南朝は藁でたばねた武者も出し　柳多留　二六
○兵粮の殼は千早の味方なり　同　四四
○敵は塵芥楠氏の藁人形　梅柳　二
○千早城すぐつた智恵の藁細工　新編柳樽一二
○藁人形軍務の才を働かせ　——（慶應二）
○たわしの武者で楠は智を磨き　柳多留一四七
○楠は藁で寄手を海鼠にし　同　八一

——海鼠は稻藁に遇へば溶けると云ふ俗説あり。『和漢三才圖會』凡海鼠性忌二稻藁一、如犯レ之則體解如レ泥、云々。

○楠はなまこの嫌らふ勢を出し　寶暦三・錦江評万句合

○敵の矢で藁人形に簑を着せ　新編柳樽一八
○矢を奪ふ智恵はすぐつた藁細工　新々柳樽　一

——一説に、これは敵の矢を奪はんが爲の謀計也と云ふ。

○藁で矢を造つて歸る智恵の海　柳多留　七九
○藁に矢の簑毛は霧の深い智恵　しげり柳
○玄賓は鳥正成は人威し　梅柳　一四

——俗説に、案山子は玄賓僧都が創案也と云ふ。

○民のする藁人形も謀事　柳多留　七二

——百姓の案山子。

○木と藁は和漢二人の智恵者なり　同　三六

——孔明の木牛の計。「木牛も仲達も首ひねる也」（柳多留四一）

○孔明と正成智恵をすぐり出し　同　三九

○人形を遣ふ千早の大仕掛　同　八四

——操の人形芝居に擬したる句。以下五句同様。

○寄手を操る人形の藁細工　新編柳樽二〇

○寄手をば人形にした藁細工　柳多留一五六

○人形で當てる千早の大仕掛　同　一四九

○楠は仕掛と譽める軍サをし　柳多留拾遺五

○楠の時代せりあげまだ知らず　櫻鯛　二

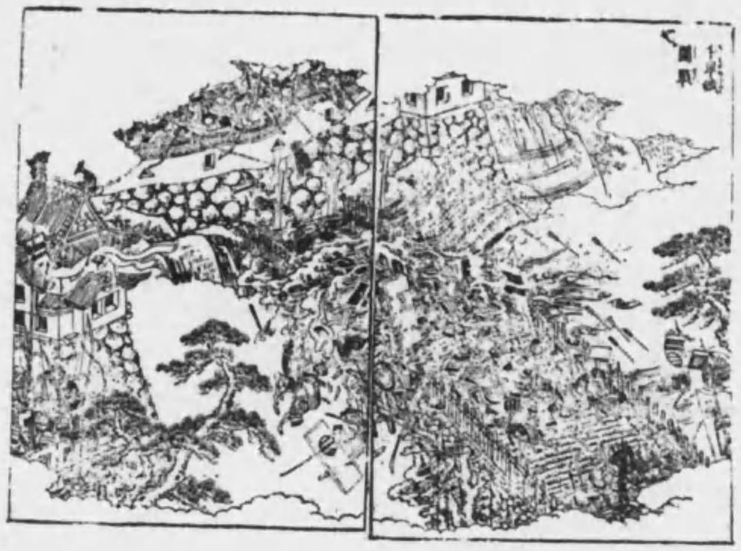
——芝居の迫り上ゲ舞臺。

○藁武者の作は南北時代なり　柳多留　九九

——狂言作者鶴屋南北を利かせたもの。以下二句同様。

○千早の操り南木が作者也　同　一三五

○南木が作藁で當て尿ではね　同　一二二



享和元年刊「河内名所圖會」所載

三月、高時は使を遣はして、城攻の諸將を督促激勵した。そこで寄手は此度は堀に橋を架けて城に打入る計畫をした。

『太平記』是れが爲に京都より番匠を五百餘人召下し、五六八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘に梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大綱を二三千筋附けて、車を以て卷立て、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲梯もかくやと

覺えて巧なり。頓てはやりをの兵共五六千人、橋の上を渡り我先にと前みたり。あはや此城唯今打落されぬと見えたるところに、かねて用意やしたりけん、投松明のさきに火をつけて、橋の上に薪を積めるが如くに投げ集めて、水彈を以て油を灑の流るゝ樣にかけたる間、火橋桁に燃え附いて、溪風炎を吹き布いたり。懐に渡りかゝりたる兵ども、前へ進まんとすれば、猛火盛に燃えて身を焦す、歸らんとすれば後陣の大勢前の難儀をも云はず支へたり。側へ飛おりんとすれば、谷深く巖そびへて肝を冷し、如何せんと身を揉みて押しあふ程に、橋梯中より燃折れて、谷底へどうと落ちければ、數千の兵同時に猛火の中へ落重つて、一人も殘らず燒死にけり。其有樣偏に八大地獄の罪人の、刀山劍樹につらぬかれ、猛火鐵湯に身を焦すらんも、かくやと思ひ知られたり。

○懸橋を燒かれ諸軍は氣を落し

「繪本柳多留」所載

る。

○楠の謀事とは云ひながら

——前句「旬ひこそすれ〳〵」。

○鼬なら屁の場で楠氏思ひ付き

これは正史には見えないが、正成は赤坂城に於ける熱湯の計の如く、敵勢に熱糞を浴せ掛けて惱ました事が傳へられてゐる。後世講釋師の創作する處であらうが、所謂千早城糞攻の計として人口に膾炙し、これを詠んだ柳句は百句近くに及んでゐ

——最後ッ屁を放るところで。

○千早の雑兵こん限り肥を取り　同　一二一

○千早城馬の屎までさらへ込ミ　梅柳　二

○千早での下知百石に一荷づゝ　新編柳樽　一

○千早の御觸ゝ百石につき一荷　甲州水上稲荷額

○楠様へ屎の書出し　誹諧醸二六

○事急で釜へたれ込む千早勢　柳多留一五五

○臆病も糞の役には立つ千早　入船狂句合

——「糞の役にもたゝぬ」の逆。

○千早攻其の時糞の役に立ち　柳の糸口

○城中の不首尾千早の結シ症　新編柳樽三八

○大屎をたれるも楠氏抱へる氣　柳の栞

——後述の泣男參照。

○軍用に使ふ千早の惣雪隱　柳多留　九九

○千早城穴藏なども屎を入れ　新柳樽　六

○目前の敵屁ともせぬ時に屎　柳の小樽

○大軍を屁とも思はず屎を焚き　まなび樽

○楠公の爲釜煎りの雪隱虫　新柳樽　一

○ハテ臭い城だと思ふうちに屎　新編柳樽二〇

○楠の伏勢黄氣立ち昇り　新柳樽　一

○糞の煮えたまで楠は知つてゐる　柳多留　八五

——俚諺「芋の煮えたも御存知ない」。

○糞の煮えたも知らないで押し寄せる　柳多留八八、同一一三

○千早城武勢に交る杓遣ひ　新柳樽　二

○正成は鼻をふさいで采を振り　柳多留拾遺五
○楠は鼻を抓んで下知をなし　柳多留　四四
○風上ミに居て楠は采を振り　同　五五
○正成は風上ミに居て下知をする　同　一二一
○楠は嗅ぎつけられぬやうに下知　新編柳樽二四
○きたなき敵の振舞や屎をかけ　當世堂版新編柳樽二
○きたなきものゝ振舞と千早攻　柳多留　六二
○千早攻きたなし引ケと寄手下知　新柳樽　一
○きたなし返セと千早の寄手いひ　柳多留　八二
○寄手もせつな屁天窓から屎だらけ　新編柳樽　四
○敵軍へ馳走千早の菜種和へ　梅柳　二四
○楠がよくは精進料理にし　柳多留拾遺五

○鎧皆黄縅になる千早勢　柳多留一〇八
○千早の寄手黄縅に成つて逃げ　しげり柳
○きな事のふん別の出た千早勢　——（嘉永三）
——奇な事と黄な事、分別と糞別の秀句。
○名將の屎には敵も煮え返り　梅柳　一
○惡才が強いと敵は屎を浴び　柳多留一二八
——惡才とアヽ臭いの秀句。
○屎が圖に當り城中ではエヘン　新編柳樽二〇、新々柳樽二
○いきんでも寄手に屎の智恵は出ず　柳多留一〇二
○楠の智略肥のやうに掛け　同　五〇
○大敵に屎は味方のこやし也　同　九〇
○味方の肥し大敵に屎をかけ　眞砂會

○大軍は鼻を抓んで逃るなり　青柳
○智計の屎が百萬の鼻をもぎ　梅柳　一四
○計略の屎いつまでも香が殘り　入船狂句合
○勝軍櫓に薫る陳皮の香　新柳樽　一
——蜜柑の皮を焚いて臭を消す。
○屎に熱湯に城は磐石　誹諧鶴　二七
——前句「成程とあとでは譽る人の智恵」。
○屎釜を持あつかつた千早城　新柳樽零本
——戰終つて釜の始末に困る。
○恥を雪がんと煮え屎浴びた兵　水天宮奉額
○敗北後千早の寄手鹽を買ひ　柳多留一四七、同一六七
——鹽で鎧を淨める。
○千早城寄手鎧の丸洗ひ　新編柳樽二七
○馬盥で鎧を洗ふ千早城　柳の糸口
○千早以後質屋鎧を嗅いで取り　同
○其當座千早の城を犬が嘗め　柳多留一四二
——犬は好んで人糞を嘗める。
○三四年千早の城下稲の出來　入船狂句合
○千早の城跡銀蠅の関の聲　新柳樽　五
○千早城雪隱の古跡なども見え　梅柳　一二
○肥取の麁相千早の古戰場　柳多留一四四
○肥柄杓豈はからんや軍器とは　同　一四三
○用ゆれば是も軍器の肥柄杓　同　一一六
○肥柄杓再び遣ふ將がなし　同　一三七

○叡覧はならぬ千早の長柄物　梅柳　七

○菊に香を添へる智謀の肥柄杓　同　一三

○蛆虫と思ひ寄手へ屎をかけ　柳多留一三三

——四月八日灌佛會の甘茶で墨を磨って、「千早振る卯月八日は吉日よ神さけ虫を成敗ぞする」と書き、厠に倒さに貼って置けば、糞蛆を除ける事が出來るといふ俗信がある。「歌書にない歌を後架に張って置き」（柳筥二）。以下四句も同様に、この俗信と千早城と兩方へ掛けて詠んだものである。

○千早にて蛆虫奴等を追ひ散らし　同　三八

○雪隠へ貼つた千早へ屎が刎ね　柳の小樽

○雪隠で屎の刎ねてる千早歌　柳の栞

○屎の側千早の歌で虫を除け　柳多留一一四、一一八

○信玄は馬場楠は屎で攻め　同　六三

——武田の家臣馬場信勝。馬場と糞の秀句。

○甘酒屋千早で敵を防ぐやう　新編柳樽　三

——甘酒賣は、俗に万年柄杓といふ大形のもので甘酒を酌む。

○楠の駒組雪隠圍ヒなり　梅柳　九

○雪隠詰これ等は御代の楠公也　同　七

——二句、將棋を利かせたもの。

斯くて、孤城よく五ヶ月の長きに亙つて大軍を支ふる中に、大和の野伏共七千餘人が護良親王の命を奉じて相集り、近くの峯谷々に隠れて寄手の糧道を斷つたので、諸國の兵は苦んで逃亡する者相繼ぐに至つた。此時寄手の中に加つてゐた上野國の新田義貞は、北條討伐の覺悟を固めて潛かに護良親王の令旨を請受け、病と稱して關東に歸つた。寄手今は幾かに十萬餘騎に減じたので、六波羅では又宇都宮公綱の率ゐる紀清兩黨を加勢に赴かしめた。

兩黨の勇猛千餘騎の新手に、十餘日の間晝夜少しも引退かず攻立てられて、

堀の際の鹿垣逆茂木は皆引破られ、城の麓は掘崩された。偶ま、天皇伯耆に還幸し給ひ、足利高氏・赤松円村の兵が六破羅を陷れたと聞いて、五月十日の早旦、寄手は皆圍を解いて逃去つたのであつた。

○楠に花の咲いたは千早なり　柳多留　八一

○千早も菊で七百騎壽を保ち　同一〇四、同一六三

——周の穆王に仕へた菊慈童、菊の靈藥によつて七百歳の壽を保つたといふ故事。但し此句に云ふ七百騎は、後の湊川の七百餘騎と誤つたものである。

○楠は二度の津波に殘りけり　誹諧鵲　八

——赤坂・千早二度の籠城を云ふ。

○千早攻神代も聞かぬ軍慮なり　柳多留一四〇

——百人一首「千早ふる神代もきかず龍田川から紅に水くゝるとは」。

○神代にもきかぬ千早の謀事　同　七二

○神代にもきかぬ千早の軍師也　同　七八

○實に神の御末千早を御ン賴ミ　同　一五〇

正成鳳駕御迎の事

これより先き、高野山の護良親王は頻りに義兵を募られたのであるが、千劍破城に於ける正成の忠誠に勵まされて、諸國に勤皇の士が相繼いで起つた。中にも赤松則村は其子則祐が奉じ來つた令旨を受けて播磨に據り、伊豫に土居通增と得能通綱が起り、肥後には菊池武時同武重父子が兵を擧げた。

隱岐に遷幸ましませし天皇はこれを聞召され、元弘三年閏二月、潛かに島を脱せられて伯耆に渡り給うた。名和長年は一族を率ひ奉迎して、船上山の行在所に警護し奉り、兒島高德等も之に加つて威勢盛んであつた。幕府は愈々驚い

て、名越高家・足利高氏の兩將を西上せしめた。

赤松則村は播磨を打つて出でて一路山陽道を攻上り、攝州摩耶山の城に據つて、京師より向けられたる幕軍を破り、

○何のかのとて赤松にまやかされ　万句合安永九・宮三

——まやかすは紛らかし迷はすの意で、摩耶山に云掛けたもの。この合戰に則村は一度は大敗して、父子六騎賤卒に裝ひ紛れて辛うじて遁れ、翌日大に敵を破つたのであつた。

○赤松の根強さ葉武者手も出せず　柳の小樽

○手負を擧めて廻る則祐　誹諧鶴　二一

これを追つて京都に攻め入り、船上山より遣はされた源忠顯・兒島高德等と合して、關東より上れる高家を討ち取つた。

高氏は西上軍の部將として丹波國に入つた頃、高家の敗死を聞いて俄に官軍に應じ、忠顯・則村と力を併せて六破羅探題を陷れた。北條時益は討たれ、北條仲時とこれに從ふ四百餘騎は逃げて近江に自害した。

○どういつて見ても仲時大丈夫　万句合明和三・信二

——前句「たしなみにけり〳〵」。仲時時に年二十八。

これと略〻同時に、新田義貞は生國上野に兵を擧げて、武州分倍河原に幕軍を擊破り、進んで稻村ヶ崎より鎌倉に攻入つた。高時以下一族將士は、或は討たれ或は自害して、北條氏は九代にして玆に全く亡びたのであつた。

○犬骨折つて高時は滅亡し　柳多留　五二

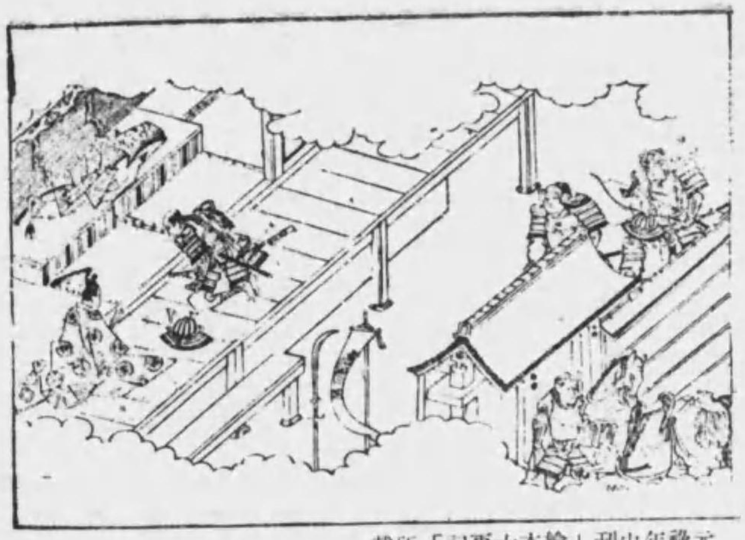
——俚諺「犬骨折つて鷹の餌食」。

○九代目に坊主が出たでばれた也　同　七

——坊主は、相模入道高時。

○一ト角が一代づゝの三ッ鱗　同　九四

——▲の紋「紋所も三三九代の北條家」（柳多留一二三）



元祿年中刊「繪本太平記」所載

○龍の鱗義貞むごく落つことし　七六

――北條氏の家紋三ツ鱗は、北條時政が江島辨財天より授かつた三枚の龍の鱗に由來する。

同　三八

六破羅陥落の報船上山に達するや、五月二十三日行在所御發輦、途中播州書寫山に行幸あつて、同じき三十日に攝州兵庫の福嚴寺に着御、其日赤松父子參向して厚く忠勤を嘉せられ、次の日には義貞より北條滅亡の注進あつて、龍顏愈〻麗しく拜せられた。

『太平記』兵庫に一日御逗留あつて、六月二日瑤輿を廻らさるゝ處に、楠多門兵衞正成七千餘騎にて參向す。其勢殊に勇々しくぞ見えたりける。主上御簾を高く捲かせて、正成を近く召され、大義早速の功、偏に汝が忠戰にありと感じ仰せられければ、正成畏つて、是君の聖文神武の德に依らずんば、微臣いかでか尺寸の謀を以て、强敵の圍を出づべく候乎と、功を辭して謙下す。兵庫を御立ありける日より、正成前陣を承つて、畿内の勢を相隨へ、七千餘騎にて前驅す。

斯くて目出度く京都に還幸あらせられたのであつた。

建武中興の事幷ニ尊氏謀叛の事

天皇隱岐に還幸ましましてより十六ヶ月の後、茲にはじめて大權は朝廷に歸して、御親政が行はれた。

建武中興の事幷ニ尊氏謀叛の事

先づ政治の中心として、先に後三條天皇の時に設けられた記錄所を復し、天皇親しく是に臨まれて萬の政（まつりごと）を聽かせ給うた。また雜訴決斷所を置いて所領に關する訴訟を判決せしめ、武者所を設けて武士の進退を掌（つかさど）らしめ、ついで護良親王を征夷大將軍に任ぜられて、以て中央政府を整へられた。地方には新たに公家を國司として武士を守護に任じ、北畠顯家を陸奥守となし義良親王を奉じて奥羽を鎮めさせ、高氏の弟直義を相模守として成良親王を奉じて關東を治めさせられた。翌年正月建武と改元せられたので、世にこれを建武中興といふのである。

次いで天皇は中興の功臣に夫々恩賞を行ひ給ひ、高氏を戰功第一として鎮守府將軍に任じ、武藏・常陸・下總の三國を與へられた上、御諱の一字を賜つて名を尊氏と改めしめられた。

○骨付の方を尊氏しめてをき　柳多留拾遺六

——行賞に尊氏一人優遇せられたるを云ひたる句。骨付とは、魚を二つに割いて其骨の付いてゐる方をいふ。即ち東魚高時を料理して、その身の多い方をせしめたといふのである。

義貞には上野・播磨を、正成には攝津・河内を、長年には因幡・伯耆を、其他功ありし公家武家いづれも一箇國二箇國を賜はつたが、何故か則村には僅かに播磨國の中の一莊佐用莊を與へられたばかりで、同國の守護に任ぜられたがそれも程なく罷められてしまつた。尙ほ此時正成は、檢非違使・左衞門尉を授けられて河内守を兼ね、河内太夫判官と稱した。

○赤松にやおつぱのやうな所を遣り　万句合安永六・仁五

——おつぱは最後、最後に餘つた所といふ意。

○赤松の植つけ知らぬ吉野公家　しげり柳

——史實を誤れる句、未だ吉野朝廷に非ず。

○直ぐならぬ賞と赤松胸ですね　當世堂版新編柳樽二

然るに行賞に不平を訴ふる武士甚だ多く、また公家はやゝもすれば心驕つて

武士を侮り、武士は其の驕傲を憤つて、公武の間に頗る融和を缺くに至つた。且つ公家は政事に慣れぬので、事務は澁滯するのみならず不公平の處置があつて、益〻武士の憤を增した。また民の疲弊をも顧ず大内裏の造營を企てられたので、租稅は殊の外に重く、かくて人心漸く朝廷を離れて、却つて昔の武家政治を慕ふに至つた。藤原藤房は、この時勢を歎き厭つて、いづれへか世を遁れたのであつた。

○藤房の出離ぶらりと出で給ひ　新編柳樽零本

○からむ世を避けて藤房散り給ひ　柳多留一四一

○藤は世を避けるに松は賞にすね　神田御社奉額

新田足利兩氏は共に源義家の子義國の裔であるが、足利氏は代々執權北條氏と緣を結んで家名は遙かに新田氏を凌ぎ、北條氏に次ぐ大族であつたので、尊氏は早くより自ら源氏の幕府を再興せんとする野心を抱いてゐて、たゞ北條氏を倒さんが爲にのみ朝廷に歸順したのであつた。今や中興政治の漸く人心を失ふを見て、巧みに私恩を施して不平の武士の心を收め、

○ぱつ〳〵と遣ひ尊氏物にする　川傍柳　三

機會の至るのを待つてゐた。護良親王は尊氏の野心を看破せられ、之を除かんとなされたが、却てその讒に遭ひ、鎌倉に幽せられ給うた。

建武二年七月、北條氏の殘黨が高時の子時行を擁して信濃に兵を擧げて鎌倉を襲ふや、直義は之を禦ぐを得ず、人を遣はして護良親王を弑し奉り、愴惶として西に奔つた。尊氏は忝（ほしいま）に大軍を率ゐて東下し、三河に直義と合し時行を敗つて、鎌倉に入つた。

尊氏は其儘鎌倉に止つて、遂に叛し、十月、自ら征夷大將軍と稱し、義貞を除くを名として兵を起した。則村を始め豫て武家政治を望める諸國不平の武士は多く之に應じて、其の勢ひは甚だ盛んであつた。

○恩賞の依怙に赤松色を變へ　新編柳樽一一

○楠よりも赤松は脂ッこし　同　三

天皇赫怒し給ひ、義貞に詔して、陸奥の北畠顯家・結城宗廣と共に、尊氏兄弟を討たしめ給うた。然るに顯家・宗廣の軍未だ到らざる中に、義貞兄弟は箱根竹ノ下に大敗して引返し、尊氏兄弟勝に乘じて之を追うて攻め上るや、播磨の則村、讃岐の細川定禪等相應じて共に京都に亂入せんとした。

明けて建武三年正月、長年は二千騎を以て勢多に禦ぎ正成は五千騎を率ゐて宇治を守つたが、山崎・大渡に陣せる義貞兄弟の一萬七千餘騎先づ破られて、鳳駕は急に叡山に遷り給ひ、諸將も亦退いて行在を固めた。

○南朝は先づ坂本に陣を張り　和國追福會

――此時未だ南北朝に分れず。

尊氏等は内裏を燒き、進んで三井寺に據つて叡山に逼る。此時陸奥より上れる顯家・宗廣の五萬の軍も、湖水を渡つて叡山に到つた。

『日本外史』諸將、因りて會して戰を議す。或は速かに之を襲はんと欲す。正成等、之を然りとす。卽夜、顯家、諸將と園城寺を攻め破る。新田義貞、遂に京師を復す。而して、夜、賊の返襲する所となり、敗れて還る。尊氏復入る。是時に當りて諸道の賊軍、悉く京師に聚る。凡そ數十萬人。而して官軍は十萬に滿たず。諸將分ちて之に將として、復京師を攻む。兵各二萬可。正成、五百騎を將ゐて糺林に軍し、火を出雲路に縱つ。尊氏、上杉憲顯・足利高經等をして、東國の騎兵五萬を以て、來り之を衝擊せしむ。正成、豫め楯數百を作りて、鈕にて之を聯ね、自ら蔽れて射しむ。賊卻く。輒ち騎を縱ちて之に乘ず。賊、辟易して逃走す。顯家・義貞遂に尊氏を擊ちて走らす。而して日暮る。義貞、留まりて京中に陣せんと欲す。正成往きて之に說きて曰く、今日、我が軍克てども、獲る所少し。寡兵を以て京中に屯せば、鹵掠

四散せん。盍ぞ前日の敗に懲りざる。敵をして復振はしめば、後力を爲し難からん。我且く引き還り、鋭を養ひて再擧し、敵を數百里外に驅らん。是れ全勝の策なりと。義貞、之を然りとし、乃ち退きて坂本に陣す。尊氏、諸軍を收めて、復京師に入る。正成素蓄ニ一卒善泣者一。

泣男謀計の事井ニ尊氏西奔の事

『三楠實錄』正成いにしへ千劍破に在りし時、松原五郎とて家の子有けるが、或時正成の前に來て申けるは、侍一人御扶助候はんやと申す、正成聞かれて、藝能有りやと問はれしに、松原曰く、させる藝は候はず、唯能く泣く者にて候と申す、正成聞て、泣くとはいかにと申されければ、松原答て曰く、されば候只今にも召出され、一泣ないて見せよと御所望あられ候へ、即時に涙を流し、哀れにも又事々敷く泣く事に於ては自在を得たる男にて候と申せば、正成聞て、夫れは世に希なる者なり、左樣の者も自然は入る者なり、捨つべきにあらずとて、即ち對面し其上にて、一泣なけよかし聞き侍らんと申されしかば、彼泣男は杉本左兵衞と申せしが、畏つてさめ〴〵と涙を流し音もこがれて泣きければ、正成實に珍ら敷事にやとて、即ち召置かれける、

○なけ聞かふなぞと楠目見得させ　柳多留　九七

○なけ聞かふなぞと左兵衞の御ン目見得　同　一三〇

——小式部の歌「鳴け聞かう聞きに北野の杜宇君のみやげにたつた一と聲」。

○宿書を涙ながらに左兵衞出し　同　四〇

——江戸時代、他家に奉公せんとする者は、自己の親妻子親類等の名を記した宿書といふものを差出した。今の戸籍謄本に似たものである。

○もうえゝと云ふに杉本しやくり上げ　万句合安永六・禮八

○もういゝ〳〵と楠召抱へ　柳多留　三五

○目をふいて杉本左兵衛飯につき　同　一二

——「飯につく」は、主家に住込むことを云ふ。

○杉本が目見得悔ミを述べるやう　新柳樽　一

——葬式の悔を述べるが如し。

○士卒みな笑ふ目見得の泣男　柳多留一〇二

○惣軍が笑ふ目見得の泣男　同　一二六

○左兵衛が目見得列席が鼻をかみ　同　一四三

——貰ひ泣をして。

○眼拭きにと左兵衛へ紅絹の引出物　同　一五四

○杉本は他家で扶助せぬ男なり　同一五、同拾遺四

○楠はなきものにして扶持を呉れ　同　四一

——無き者と泣き者の秀句。

○泣いてさへ抱へらるゝに笑ひなば　同　一五四

○笑ひ男も有ッたなら抱へる氣　同　九三

世の人此事を傳へ聞き、あざ笑て申けるは、楠殿程の名大將には似合はぬ童らしき事の有ぞかし、あれが何の用に立つものぞといへば、或人の曰く、いや〳〵あの男の泣くを聞ては我々も泣かれ侍る、其身の泣くはよしや兎もあれ、傍への人まで泣かせぬるは希しきものにて侍るといへば、又或人の曰く我身の泣くさへ忌々しきに、人まで泣かせぬるは如何にしても不吉也なんど、取々に沙汰仕ける也、

○忌々しい男だと恩地は睨め　万句合安永九・禮六

——恩地左近、左兵衛をいま〳〵しがる。

○八尾ほろり〳〵杉本べろり舌　入船狂句合

○八尾は泣き左兵衛くす〳〵笑ひ出し

――八尾別當顯幸は、左兵衛の抱へられたるを不服に思ひ、左兵衛の一藝若し我を泣かせ得ざる時は其首を刎ねん、我若し涙を流す時は我が佩刀を與ふべし、と誓へた。對決勝負の結果、左兵衛の僞りの身の上話に八尾は不覺涙を流して、佩刀を持去られたといふ。『楠廷尉秘鑑』

正成申されけるは、何事にても侍れ、人並に勝れたる事をせんは藝なり、必ず用の事有らん、夫れ聾盲の人さへ分に隨て世の用事をなす、況んや聾盲に非ず啞に非ず、人に勝れたる藝を持ちたるをやとて、扶助せられしとなり、

柳多留　一七

○涙より外には智恵の出ぬ男　同　五七

○計略のほかには用のなき男　同　六四

○泣カせては杉本一本遣ひ也　同　八六

○一藝は左兵衛に並ぶ右兵衛なし　梅柳二〇、新柳樽六

○悔ミ使者左兵衛に並ぶ右兵衛なし

――聾の悔の口上。

○泣男悔ミの使者にもつてこい　柳多留一一七

○内職に左兵衛悔ミの指南する　同　一五一

○祝ひ日は手前遠慮で左兵衛ひま　同　一二八

○笑ふ日は杉本左兵衛非番也　誹諧鰕　二〇

○式日は左兵衛斷リなく非番　柳多留一五一

○退出の左兵衛を蜂がつけ狙ひ　柳の小樽

――俚諺「泣きッ面に蜂」。

○左兵衛退出蜂が來てつけ狙ひ　新編柳樽　三

○蜂が寄り左兵衛の面ラをやたら刺し　柳多留一三九

○蜂曰く刺してい面ラは左兵衛だナ　新々柳樽　六

○杉本は可笑しくなると笑ひ泣　柳多留一三四

○不機嫌の時に左兵衛は笑ひ顔　同　一五一

○極難義左兵衛笑ひを所望され　新編柳樽一一
○左兵衛もにこり初夢に不二の山　歳旦會（嘉永五）
○杉本左兵衛笑ふ元日　誹諧鶴　二二
○語らせて見たき左兵衛に三の切リ　柳多留一二一
——浄瑠璃の三の切は悲嘆場。
○傾城にして見たいのは彼の左兵衛　同　一〇七
○左兵衛の産聲天然と物哀れ　同　一三五
○疳の蟲らしい左兵衛が幼だち　同　一五四
——疳症の小兒はよく泣く。
○屁をひつた事にも左兵衛べそをかき　新編柳樽一四
○長泣を叱られもせぬ左兵衛が子　柳多留一四四
○おとゝ様似に杉本の乳母困り　同　一五四

○左兵衛が子玩具に青い泣人形　歳旦會（慶應元）
去れば此時、義貞の方へ行向て、傍への人御除け候へ、申談ぜん事有りとて、義貞に申されけるは、某明日僧を仕立て戰場にて泣かせなん、然らば京勢怪しみを成し事の由來を尋ね侍らんに、僧に云はせんずるやうは、是は正成由緣の僧にて侍るが、昨日の合戰に正成矢に當て討れ、北畠殿新田殿も討れ給ふ由に侍る、此故に孝養の爲正成の死骸を求め侍ると申して、常々正成が情け深かりし事など謂ひ語らせて泣かすべし、殘の僧も諸共に泣き侍らんづるなれば、人の心の愚さは忠節顔に成て尊氏兄弟に語るべし、彼等兄弟の者共物忌深く愚なる者なれば、實ぞと思ひ、手の者共に謂ひ聞かせて心をゆるし侈りなん、然らば味方、夜半過る程に下部に申付け、松明二三千も燈し連りて四方の嶺の道々へ行かしめんに、尊氏兄弟東寺より是を見て、すは宗徒の者共が死したるに依て落ち行くなるぞ討留めよとて、方々へ兵を分ち遣はす

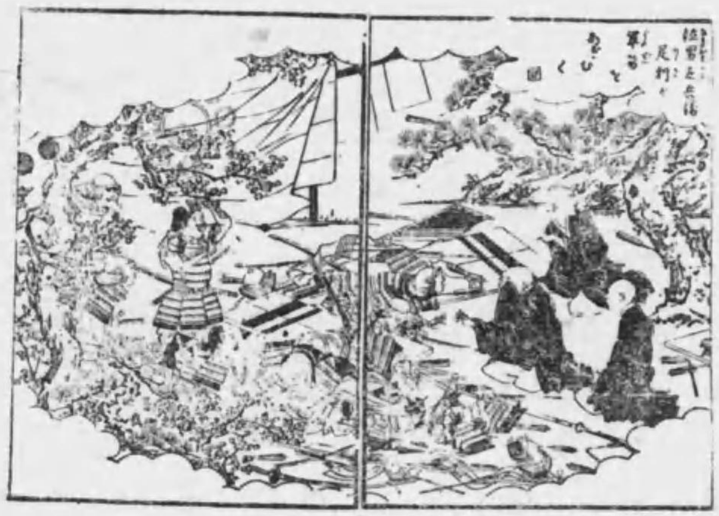
べきなれば、其跡へ味方一手に成て押寄せなば、尊氏兄弟を討たん事案の内に侍ると申されしかば、義貞曰く、實に由々敷御謀に候、さりながら其泣男一人こそ泣き申さんづれ、自餘の僧は何事にか泣き侍らんと申されしかば、正成曰く、いざとよ彼が泣く有様を見ては自ら哀れに罷成て、如何なる者も不」覺愁涙を催し侍ると申されしかば、義貞、希有なる者を召置れ侍るもの哉と申されし、

○楠は變な藝者を抱へ置き　万句合安永三・仁四

○正成はべそり〳〵に扶持を呉れ　露丸評万句合（寶暦三）

――前句「それ〳〵な事〳〵」。

それより諸大將へも此由を談じ合せ、而して宿所に歸り杉本左兵衞を呼び寄せ、此旨を申含め、此謀成りなば汝は所領一所の主と成りぬべし、然れ共僧の作法少しも知らずしてはとて、傍ら近き里に律僧の在りけるを請じて深く



「繪本楠公記」所載

泣男謀計の事并ニ尊氏西奔の事

賴み申されしかども、戒法に背き侍ればと、て諾はざりしかば、然らばとて其僧を正成の宿所に留置き歸さず、是は此事を少も漏らさじと思ふ處にあり、然れば和爾近き邊に寺院の有りければ、其れへ八尾の別當に杉本をさし添て遣はし、密に賴ませけるは、正成討れて候、死骸を求め葬送の形儀も仕り度く侍ると申しければ、住持の僧誠ぞと心得て甲斐々々しく賴まれければ、杉本聽て髪切て彼僧の弟子となり、それより僧侶三四人隱れて京都に上り昨日の戰場に至りぬ、杉本道すがら僧に語りけるは、

正成のみに非ず新田殿にも討死候とも申す、又北畠殿も痛手負ひ給ひたりとも申し或は討れ給ひたりとも申すと語りければ、同道の僧侶も、哀れ名將達にて渡らせ給ひし者をとて、そゞろに袖を濡しける、扨それより戰場に至り泣々死骸を求むるに、昨日敗軍の勢共、或は主或は親又は子など討たせたる者多ければ、是等も死骸を求むるに、杉本も最も哀れに人に勝れて泣き求めける程に、怪む者も多けれどさのみ隱すべきに非ずとて、三人の大將達の討れ給ひし由を語るにぞ、聞人皆涙を流さぬはなかりけり、

○子の死んだやうに左兵衞は泣てゐる　柳多留　二二

○いま葬が出るやうに左兵衞泣き　同　一五

○泣男洟をたらすはおまけ也　同　一三〇

然れば此事卽時に尊氏兄弟の耳に入りしかば、近習の者共僞て死骸を求むる體にて、杉本に此由を問へば件の旨を語るにぞ、問ひし者も哀れに覺へて、涙をぞ流しける、さて求むれども共れと覺しき死骸もなし、日も已に暮ぬべしとて、同道の僧侶は先へ返し、杉本は後に留り京中に入り敵の樣を見ける に、有るにもあらぬ首を拾ひ、楠正成の首新田義貞の首とて獄門に懸け、高札を添へて置きければ、杉本是を見て最も可笑しく思ひしかば、獨言云ひて京を出で、亥の刻過る程に坂本にぞ歸りけり、

○謀りおほせると左兵衞も少し笑ミ　ことたま柳

『大日本史』是に於て、正成諸將と軍を潛めて夜發し、別に卒を遣はして、炬を持ち、山に遵ひて西に行き、綿綿として相屬せしめたるに、賊軍、之を望みて、尊氏に告げて曰く、官軍、將領を失ひて、今、皆亡げ去ると。尊氏、兵を遣はして、諸道に要せしめ、餘衆は、復警備せず。詰旦、正成等、進みて京師に入り、火を放ちて掩ひ擊ちしに、賊軍、大に潰え、尊氏、竟に西に走り、器甲を遺棄して路に載てり。

○勝ち軍サめそり〳〵と左兵衛賀し　柳多留一二四、同一二七
○勝ち軍勇む諸將に泣く左兵衛　同　一六〇
○泣男まで笑ふ凱陣　誹諧鶴　二四
○泣く門に福の來たのは左兵衛の身　柳多留一四三
——「笑ふ門には福來る」の反對。
○左兵衛が加增泣く門へ福來る　新編柳樽三六
——加增は扶持が增すこと。
○御愁傷樣と左兵衛が加增賀し　柳多留一二二別
○北條がなければ只の左兵衛なり　同　一三八
——「足利がなければ」云々とあるべき句。
○泣がけも尊氏已後は最くはず　同　一
○二度目には役に立たざる泣男　滿都廼可氣
○尊氏を一本はめる泣男　尙齒會
○楠も涙で一度敵をかき　柳多留　四九
○楠は涙の水も用に立て　同　八〇
○楠は泣かせて勝つて笑つて居　同　八六
○百萬餘騎を泣て謀れり　誹諧鶴ケイ二
○葬禮の眞似六韜に無い軍慮　柳多留一六六
——六韜は、俗に太公望の作と傳ふる六卷の兵書。
○和漢の謀計空啼と男泣　同　一一四
——孟嘗君、函谷關の鷄鳴の計。
○奇な事を軍の作意男泣き　同　一五一
——此句は廻文、卽ち上下いづれから讀んでも「きなことをいくさの……」となる。
○泣き女なれば楠まだはねる　同九、同拾遺五

——はねるは、大きな事をやる、成功するといふ程の意。

○泣女ならば楠なほ勝利　同　一二三別

○泣女だと楠はもつと勝ち　新編柳樽一八

——泣女云々の句は、なほ他に三十餘員もあるが、いづれも猥雜なる句なれば省略に從ふ。

○愁嘆は杉本濡れは左中將　柳多留一三五

——芝居の愁嘆場濡れ場を利かす。左中將は新田義貞、後述。

○煙で泣かせる蚊遣火に楠や杉　同　一三三

○楠の蚊遣りに座中皆左兵衛　同　一四一

——楠の枯枝を蚊遣に焚くと、座中が皆煙がつて涙を出す。

○杉本左兵衛蚊遣にも泣く　誹諧[illegible]　二六

○楠蚊遣り圍爐裏の端が泣男　柳多留一二三、同一二七

○楠の蚊遣り數萬の敵を追ひ　同　九九

○押寄せた蚊が楠で裏崩れ　陀羅尼追善會

——此二句、泣男には關係なけれど便宜此處に挿む。

○本所で或夜左兵衛の泣男　柳の糸口

○杉本へ左兵衛泣込む腑甲斐なさ　柳多留　九五

——二句、吉良上野介の息左兵衛義周。此句の杉本は上杉家を指す。

正成、遂に諸將と追ひて豐島河原に至り、足利直義と戰ふ。正成、兵を引きて賊の後に出でしかば、直義、戰はずして退き、尊氏と、海に航して遁る。

○尊氏はとほうづもなく逃げて行き　柳多留　一二

——遠く九州まで。

○足の利く大將筑紫まで逃げる　同　五四

正成兵庫に下向の事附り義貞と内侍の事

鳳駕は京都に還幸せられたが、斯くて、建武中興の業は漸く破局に直面するに至つた。二月、年號を延元と改められた。

尊氏九州に下るや、肥後の菊池武敏等勤皇の士は之を邀擊せんとし、筑前多々羅濱に戰つたが却て大いに敗られて、尊氏の勢ひは僅か一ヶ月にして九州全土を風靡して頗る振つた。

先に尊氏西奔の際、正成は直ちに之を追窮して潰滅せんと欲したのであるが義貞はたゞ徒に遷延して戰機を失つた。これは、「其比(そのころ)天下第一の美人と聞え し、勾當内侍を内裏より賜はりたりけるに、暫しが程の別を悲(かなし)みて」遲れたのであると、『太平記』は云つてゐる。

○なからはんじやくで義貞ずるけ出し　柳多留六、同拾遺六
○官軍の惣大將は朝寢なり　同拾遺　五
○新田の陣觸レまた今日も御延引　同　一五七
○出陣もせずに内侍とつくし也　同　一五
○こびついて居て楠に留守といひ　同　三〇
○こびりついて丶楠に留守といへ　同拾遺　五
○楠が來ると箒を内侍立て　同三〇、同拾遺五
——早く歸らせる呪。
○逃げたらそれでい丶わなと内侍とめ　同　二八
○ひとりでに亡(ほろ)びやせふと内侍云ひ　同拾遺　五
○軍(サ)に出るがい丶のさと内侍すね　同　八一
○楠がどうか仕やうと内侍いひ　同拾遺　五

○筑紫へは畑でもお遣りなんし也　同　一五

——義貞の部將畑六郎左衞門。

○ねき寄らんせに義貞くらひ込み　同　九八

——「ねき寄らんせ」の京言葉に、東夷が捕へられる。

○勾當の內侍因果と美しい　同　六

○楠は美しいのをたておろし　同　九

——「たておろし」は、こきおろしと同義、惡し樣に言ふこと。

○勾當の內侍で番が大狂ひ　同拾遺　五

○長追ひをせぬが義貞落度也　同　一七

斯る中に、則村を始めとして尊氏の叛に應じた武士共は、播磨・美作・備前・備中・備後を掠め領して、九州へ向ふ討手を海陸共に妨げんとした。三月、義貞は播磨に下つて則村の據れる白旗城を圍み、弟義助は兒島高德と共に備前・備後を攻めて略定した。則村の子則祐は筑紫に馳せて尊氏に援を請うた。

四月下浣、尊氏は大舉海路を東上して、備後鞆津に直義を上陸せしめて義助・高德を敗り、自ら水軍を率ゐて海陸並び進むや、四國中國の兵の來り屬する者相次ぎ、その鋒は甚だ鋭かつた。義貞は退いて攝津兵庫に屯し、書を飛ばせて急を京都に告げた。

『太平記』主上大に御騷ぎあつて、楠判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷下り、義貞に力をあはせて合戰を致すべしと仰せられければ、

○尊氏が憎いとばかり御ンたのみ　誹諧稿　二六

正成畏つて奏しけるは、尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に懸合つて、尋常の如くに合戰致し候はゞ、御方決定打負け候ひぬと覺え候ふなれば、新田殿をも唯京都へ召し候うて、前の如く山門へ臨

幸成り候ふべし。正成も河内へ罷下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ兩方より京都を攻めて兵糧をつからかし候ふほどならば、敵は次第に疲れて落下り、御方は日々に隨つて馳集まり候ふべし。其時に當りて、新田殿は山門より推寄せられ、正成は搦手にて攻上り候はゞ、朝敵を一戰に滅す事ありぬと覺え候。新田殿も定めて此料簡候ふとも、路次にて一軍もせざらんは、無下に云甲斐なく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戰は兎ても角ても、始終の勝こそ肝要にて候へ。能々遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候ふと申しければ、誠に軍旅のことは兵に讓られよと、諸卿僉議ありけるに、

○正成に任かせ給はゞ何のその　講諧編　二三

重ねて坊門ノ宰相清忠申されけるは、正成が申す所もその謂ありといへども、征伐のために差下されたる節度使、未戰を成さゞる前に　帝都を捨てゝ、一年の内に二度まで山門へ臨幸ならんこと、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ處なり。縱令尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戰の始より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻靡けずと云ふことなし。是全く武略の勝れたる所にはあらず、唯聖運の天に叶へる故なり。然れば唯戰を帝都の外に決して、敵を斧鉞の下に滅さん事、何の子細かあるべきなれば、唯時を替へず、楠罷下るべしとぞ仰出されける。正成この上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

○楠に不足なものは運ばかり　万句合明和元・義一

櫻井驛訣別の事

『太平記』正成是を最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を殘しけるは、獅子子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ。其子獅子の機分あれば、敎へざるに中より跳返りて、死する事を得ずといへり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我敎誡に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んこと、是を限と思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死殘つてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずると、泣々申含めて、各東西へ別れにけり。

○强い事正行落す親の獅子

万句合寶曆八・一一・五・梅

——「根性を逆さに試す獅子の親」（柳多留拾遺九）

寛政十二年刊「太平記繪本」所載

○栴檀を河内へ歸へす殘念さ　同安永四・仁三

——俚諺「栴檀は二葉より香し」。

○忘れなと正行が脊を撫でながら　誹諧鶴　二五

○武の道を正ク行ケと御訓戒　柳多留　九一

○忠道を正しく行ケと御

遺訓

○遺狀に正行しばし霜の菊

櫻井驛訣別の事

——『楠公遺訓』なる書あり、櫻井驛にて正行に與へられたるものと稱せられてゐる。

○花も實もある櫻井の御遺言　柳多留　九〇

○櫻井の松に遺訓の若みどり　新柳樽　一

——「子別れの松」、今は枯れて亡し。

○櫻井の宿で殘らず云ひ含め　万句合安永六・義五

——此句は勸皇の士蒲生君平の詠。

○瓜の蔓の瓜櫻井から返へし

——但諺「瓜の蔓に茄子は生らぬ」。

○正成は冬瓜の花に實を持たせ　柳多留一一二

——冬瓜の花は百に一つしか實を結ばぬといふ。正行の如き良い子を得たるを喩へたる句。

○櫻井で勇まぬ駒を引返し　同　八七

○櫻井へ來て北敵へ引返し　同　一〇四

○櫻井の宿から戻る芳ばしさ　万句合明和五・龜一

○立派な涙櫻井で子を歸へし　柳多留一六二

○櫻井の宿忠孝の引別れ　新柳樽　二

○櫻から返す茶も吉野方　柳多留　八一

○子を返す宿は櫻井人は武士　同　八四

——「花は櫻木人は武士」の捩り。

○櫻井の宿散りぎはも花々し　しげり柳

○楠も櫻で茶追ひかへし　柳多留　七九

○櫻井の宿を譽れの返り咲　新編柳樽二四

○櫻井の宿名木の枝を分け　同　三〇

○忠と孝菊を根分けの湊川　梅柳　二二

○菊水を茶へわける湊川　柳多留　七四

○櫻井の宿から歸るいゝ息子　同　六六

○楠の息子は櫻限り歸り　同　五二

湊川討死の事

『日本外史』正成乃ち兵庫に至り、義貞を慰勉して、訣飲すること終夜。是時に當りて、尊氏、水軍に將たり。直義、陸軍に將たり。陸軍は五十萬と稱す。正成、手兵七百を率ゐ、湊川に陣して之に當り、義貞、三萬騎を以て和田崎に陣して、水軍を扞ぐ。水軍の先鋒過ぎて東す。義貞、軍を拔きて之に循ふ。而して尊氏の全軍、已に和田崎に上れり。正成、顧みて正季に謂ひて曰く、我、腹背に敵を受く。遁る可からず。先づ前者を破りて而る後、背者に接せん。如何と。正季曰く、然りと。是に於て兄弟並びて陸軍に突入し、七離七遭、直義を獲んと欲す。直義、馬傷きて墜つ。我が兵及ぶに垂んとす。一敵將あり、遮り鬪ひて之を逸せしむ。尊氏も亦兵を分ちて來り援け、我が軍の後を包む。正成兄弟回馬當之、血戰十六合、盡亡其騎。所餘七十三騎。

○しらつこの勝負を湊川ばかり　万句合明和四・梅四

——「しらつこ」は寳彦道の語、インチキなしの勝負を云ふ。此句では、奇計を用ひぬ軍といふ程の意。

『補廷尉祕鑑』正成は今度の合戰には、前の如く方便もなし給はずして、間者物聞の沙汰もなく、云々。

○旗持はしびれのきれる湊川　柳多留拾遺六

○旗持の一ト息眠る湊川　万句合明和四・仁一

——卯ノ下刻（午前七時）から酉ノ刻（午後六時）まで血戰十六合といふ長時間に亙つた合戰で、旗持はさぞ退屈をした事であらうと云へる句。

『太平記』正成正季又取つて返して此勢にかゝり、懸けては打違へて殺し、

懸入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで闘ひけるに、其勢次第々々に滅びて、後は纔に七十三騎にぞ成りにける。此勢にても打ち破つて落ちば落つべかりけるを、楠、京を出でしより世の中の事、今は是までと思ふ所存ありければ、一足も引かず戰つて、機已に疲れければ、湊河の北に當つて、在家の一村ありける中へ走入つて、腹を切らんために、鎧を脱いで我身を見るに、斬創十一箇所までぞ負ひたりける。此外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に並居て、念佛十返ばかり同音に唱へて一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、抑最期の一念に依つて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なると問ひければ、正季から〳〵と打笑ひて、七生まで唯同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども我も斯樣に思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、此本懷を達せんと契つて、兄弟共に刺違へて、同じ枕に臥しにけり。橋本八郎正員、宇佐美河内守正安、神宮寺太郎兵衞正師、和田五郎正隆を始めとして、宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十餘人、思ひ〳〵に並居て、一度に腹をぞ切つたりける。（中略）抑元弘より以來、忝くも此君に憑まれ進らせて、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。然れども此亂又出來て後仁を知らぬ者は、朝恩を捨てゝ敵に屬

「太平記繪本」所載

し、勇なき者は、苟くも死を免れんとて刑戮にあひ、智なき者は、時の變を辨ぜずして、道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未なかりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣横に威を振ふべき、其前表の驗なれ。

○後ロ厄などゝ正成惜しがられ　柳多留拾遺五

——時に延元元年五月二十五日。正成年四十三。

○奥方へ遺言はなし湊川　柳多留　四

○名木の一本枯れる湊川　同　五九

○官軍の柱を流すみなと川　同　一一四

○湊川菊の流れる惜しい事　同　二六

○菊水の末も濁らぬ湊川　柳の若葉

○菊水の齡も延びぬ湊川　柳多留一三六

○菊の水でも七百騎壽を縮め　同　九二

——二句、南陽郷縣菊水の故事。

○七百騎歸らぬ水のみなと川　同　九一

○千早振る弓矢もきかぬ湊川　同　六六

○吉野方花に嵐の湊川　同　一〇六

○北は晴れ南は曇る湊川　同　七五

○山鳩の御衣をも濡らす湊川　同一一九、梅柳八

○日月の御旗も曇る湊川　柳多留　四八

——二句、天子の御衣と錦旗。

○旗持も貰ひ泣きする湊川　同　八

○湊川ほんに泣いたと左兵衛いひ　同　一八

○湊川杉本左兵衛ほんに泣く　一一六
○みなと川此時ほんの泣男　誹諧鶴　二〇
○杉本を實に泣かせたみなと川　柳多留　六一
○嗚呼と先づ左兵衛の泣いた湊川　同　九八
○湊から弘誓の舟に楠氏乗り　柳多留一五一
——弘誓の船、佛菩薩の衆生濟度を船の人を乗せて渡すに譬へて云へる語。　ことたま柳
○本朝の臥龍を惜しむ湊川　柳多留一一六
○和の臥龍遂に潜まる湊川　同　一二五
——二句、臥龍岡の諸葛孔明に比す。
○楠が袋流したみなと川　朝熊嶽
——智惠袋を。
○楠石の忠死細川みなと川　柳多留一〇八
——大石良雄細川邸にて切腹。
○湊川志貴たつあとに馬煙り　同　九〇
——此戦に志貴右衛門は、左襄の三百騎を率ゐて、直義軍の前衛を待伏してゐたのであつた。
○心なき身にも哀れな志貴右衛門　同　一〇三
——二句、西行法師鳴立澤の歌を利かす。
○いりもせぬ首をぶつ切る湊川　万句合安永元・智二
——『太平記』湊川にて討たれし楠判官が首をば、六條川原に懸られたり。（中略）其後（中略）跡の妻子ども、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られける。

正行の事幷ニ吉野朝廷の事

正成討死し義貞破れ歸るや、鳳駕は又叡山に遷幸せられて、尊氏の軍は破竹の勢ひで入京した。其後、皇軍は屢〻敗られて、忠顯・長年等の諸將は相次い

で戰死した。

尊氏は賊名を避くる爲、恣に光明院を擁立して天皇と稱へ奉つたが、軈て佯り降つて後醍醐天皇に還幸を請ひ、畏くも天皇を花山院に幽して、强ひて神器を光明院に讓らん事を請ひ奉つた。天皇は已むを得ず一旦僞器を授け給ひ、延元元年十二月、眞の神器を奉じて大和に潛幸し給うた。

『日本外史』帝、夜、婦人の衣を服し、壞牆より出づ。扶けて馬に上せ、景繁、神器を荷ひて從ふ。夜、方に黑し。赤電の路を照すに逢ふ。曉る比、穴生に達す。景繁を遣はして、吉野の僧宗信を諭す。宗信は嘗て將軍護良を助けし者なり。是に於て、衆に先だちて來り迎ふ。正行聞きて大いに喜び、從弟和田正朝等と馳せて之に赴き、駕を護りて吉野に入る。河内・紀伊の將士、相踵ぎて來り衞り、官軍復振ふ。帝、正成が王事に死せしを思ひて、正三位・左近衞中將を追贈し、正行を正四位下に叙して帶刀と爲す。遂に父の官を襲ぎて、檢非違使・左衞門尉に任ぜられ、河内守を兼ぬ。

○孝行さ親の手本を反古にせず　柳多留　六三

○櫻より菊を吉野で愛で給ひ　新編柳樽一七

——吉野櫻よりも菊水を。

○金剛を杖と頼んだ吉野方　新々柳樽　二

——金剛杖、金剛山下の楠木氏を指す。

天皇仍ち吉野に行宮を定めて政を聽かせ給ふ。世にこの吉野の朝廷を南朝といひ、尊氏が恣に京都に創めたるを北朝といふ。

○切ッ株の上へ吉野の紫宸殿　柳多留　一〇

——櫻の切株。

○みんなみは櫻の中に紫宸殿　万句合安永元・義二

○内裏中左近だらけな吉野御所　柳多留一四五

正行の事并ニ吉野朝廷の事

○橘をすでに吉野へ植ゑるとこ　鱗舎評万句合
　——左近の櫻。

○日月の旗も吉野の花曇　柳多留　六九
　——右近の橘を。

○吉野御所山に入るさの日の御幡　同　一〇四

○年號も吉野の頃は八重に成り　同　一一四
　——南朝北朝に各年號あり。

○年號も吉野の方は櫻ざめ　同　二二
　——櫻褪めは、變り易いものゝ譬。

○南朝の御遊居ながら櫻狩　柳多留　二一九

これより先き義貞は勅によつて、皇太子恒良親王並に尊良親王を奉じて越前金ヶ崎城に據つてゐたが、延元二年、城陷つて尊良親王は義貞の子義顯と共に自害し給ひ、皇太子は捕へられて京都に弑せられ給うた。義貞は一旦遁れたが翌三年越前藤島に戰死した。又さきに陸奥に歸つた顯家は、再び義良親王を奉じて西上し、京都を回復せんと計つたが、同じき三年和泉石津に戰死した。

南風不レ競、　天皇は御憤悶の中に翌延元四年秋八月、王業恢復の遺詔あつて吉野行宮に崩じ給うた。多年附き參らせし公家達も最早氣沮んで各〻逃散ぜんとするのを執行宗信法印が力言して止むる所へ、正行は從弟正朝と共に兵二千を率ゐて馳せ參り、行宮を守護し奉つたので、人々は安堵して退散の思を靡へした。

○宮破損楠の柱で建直し　新編柳樽　二

○楠の柱で建直す吉野御所　同　二

是に於て、皇太子義良親王卽位し給ふ。これを後村上天皇と申上げる。

さきに常陸に在つた北畠親房は、陣中倥偬の間に、皇統の由來を說き國體の

本義を明かにせんとして『神皇正統記』を著したが、戰に利なくして吉野に歸り、正行と共に京都回復の策を講じた。爾來正行は屢〻北軍を惱ました。

○一旦は花も咲かせた吉野方　柳多留　九一

○花に風しばし南の木で防ぎ　御嶽山奉額

○花は咲かねど楠は吉野方　柳多留　八一

○陀羅助の山で楠兵を練り　神田御社奉額

——陀羅尼助（略して陀羅助とも云）の練藥は吉野大峰の名物。「北朝の癪には利かぬ陀羅尼助」（柳の丈藏）

○吉野路の空に轟く法螺の貝　柳多留一一一

○不風雅な軍吉野でおッぱじめ　同　二四

○夜ル〳〵は櫻に狂ふ吉野勢　誹諧一枝筌

○楠の勢は非番に花見に出　万句合明和元・禮二

○絹より木綿が丈夫だと吉野公家　神田御社奉額

——足利絹と河内木綿。

○河内の綿打北朝へ弓引く氣　入船狂句合

——河内國は木綿の產地。

過ぐる元弘の亂に斬られた日野俊基の女は、辨内侍といつて吉野の皇居に仕へてゐた。尊氏の臣高師直はその美色を聞き慕ひ、内侍の伯母を利を以て誘ひ僞の迎を出させて、己が家來を遣はして途中にこれを奪はんとした。偶正行これに行逢ひ狼藉者を斬拂つて、内侍を吉野に送り還した。天皇御感の餘り、内侍を正行に賜つたが、正行は、

とても世になながらふべくもあらぬ身の假りの契をいかで結ばん

とて、辭し奉つた。其後、内侍は正行の戰死を聞き髮を下して佛門に入つた。

○檢非違使花の賊追ふ吉野御所　三箱追福會

——正行は檢非遣使。

○途中でばれる師直の贋迎ヒ　新編柳樽二四
○正行が達勅は賜ふ花を辭し　三箱追福會
○散る覺悟正行花に眼はかけず　しげり柳
○散ると期し賜はる花を辭す吉野　入船狂句合
○歌で辭す情ヶの道も臣の忠　當世堂版新編柳樽二
○ながらへぬ身には不辨と辭す內侍　入船狂句合
○いかで結ばんと玉の緒つながぬ氣　佃島住吉社奉額
○いかで結ばんと詰めたる命綱　舞扇句合
○いかで結ばんと解けいたる樣はなし　品川虛空藏芹奉額
○いかで結ばんと下紐忠に辭し　ことたま柳
○いかで結ばんとすつぱり腹を締め　柳の小樽

○結ばんの歌髮を切り辨內侍　しげり柳

正平二年冬、尊氏は、河內の正行を擊たんとして、高師直を將として大軍を向かはしめた。正行は、弟正時を始め一族打連れて吉野の皇居に參り、己れ等が覺悟の程を奏上して、御暇乞を申上げた。

『太平記』主上則ち南殿の御簾を高く捲せて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて正行を近く召して、以前兩度の戰に勝つ事を得て敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤(いきどほり)を慰する條累代の武功返す〳〵も神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事は、勇士の心とする處なれば、今度の合戰手を下すべきに非ずと雖も進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす、愼で命を全うすべしと仰せ出されければ正行頭(かうべ)を地につけて、兎角の勅答に及ばず、たゞ是を最期の參內な

りと思定めて退出す。正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠將監、西河子息、關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に各名字を過去帳に書連ねて、その奥に、

返らじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとゞむる

と一首の歌を書留め、逆修のためと覺しくて各鬢髮を切つて佛殿に投入れ、其日吉野を打出でゝ、敵陣へとぞ向ひける。

○忠に首曲げず如意輪堂へ辭世　ことたま柳

——如意輪堂の本尊如意輪觀世音は、右方へ首を曲げて居られるが……。

○如意輪の堂に勇氣の筆の跡　當世堂版新編柳樽二

○歸らじとかねて吉野に名をとゞめ　新編柳樽一二

○梓弓濁らぬ水で引き給ひ　柳多留一五二

——濁らぬ水は菊水。

寛文年中刊「楠いくさ物語」所載

『日本外史』　明年正月、北軍、四條畷に至り、分れて五隊と爲り、四隊は前に在り、左右相向ふ。而て師直の中軍、遙かに其後に居る。兵、凡そ八萬騎。正行隆資をして、賊の前軍を輟めしめ、而して自ら三千騎を將ゐて、直に其中軍を指す。賊の前隊馳せて之を遮る。正行先鋒を以て擊破して過ぐ。賊隊又

至り、我が後軍と戰ふ。我が後軍終に敗走す。正行顧ず、三百騎を以て直に前む。賊將細川清氏・仁木頼章等、更進みて遮鬪す。正行盡く之を破り、乃ち其騎を聚む。馬皆重傷す。乃ち馬を捨て、隴に踞して餉す。賊衆環視し、敢て迫らず。其走路を開きて、皆中軍に合す。正行餉し畢り、起ちて衆に謂ひて曰く、必ず師直と死を決せんと。進みて其中堅を衝く。我が兵殊死して戰ふ、一以て百に當らざるはなし。賊軍披靡す。正行進みて師直に逼る。（中略）其幟を望見して、之を追はんと欲す。正朝曰く、彼は騎、我は歩、及ぶ可からず。佯り走りて之を誘はんに若かじと。乃ち殘兵五十人と楯を負ひて北ぐ。師直敢て追はず。其裨將をして、數百騎を以て之を尾擊せしむ。正行大呼して返り戰ひ、走るを追ひて復師直に逼る。相去ること數歩。而して我が兵は晨より晡に至るまで三十餘合。力索きて、能く起つ莫し。正行、目を師直に注ぎ、衆を勉めて前進す。敵、之を連射す。正行身に箭を被ることゐの如し。乃ち呼びて曰く、已まん。賊の獲る所と爲る勿れと。正時と相刺し、北に向ひて斃る。年二十二。餘兵皆自刄して駢びて斃る。（中略）是に於て、百四十三人、悉く之に死せり。

新編柳樽三三

○歸らじと撚りも戻らぬ繩手の死　差柳

○撚りも返らじ正行の繩手の死

——繩と撚の縁語。

○ア、小楠子は清忠と孝を兼ね　滿都廼可氣

○吉野葛先づ櫻井の水が切れ　柳多留一一〇

——櫻井で分れた菊水。葛は吉野の名物。

○暖の後くずばか殘る吉野御所　御嶽山奉額

——葛と屑の秀句。此句は皮相なる觀察、猶北畠親房あり矣。

○菊枯れて重陽淋し吉野御所　柳の小樽

——重陽は、九月九日菊の節句。

○南天の根締めに活けた菊も散り　佃島住吉社奉額

——活花に喩へたるもの。

正儀の事附リ太平記の事

『日本外史』賊軍進みて行宮を犯す。帝逃れて穴生に入る。賊、火を縱ちて之を索む。正行の弟左衞門尉正儀、兵を石川に出し、高師泰と相持す。師直則ち敢て深く入らず、兵を引きて去る。

正行の弟正儀も亦、一族和田氏等と共に、南朝の爲に苦戰し、後村上・長慶・後龜山の三朝に仕へ奉つたが、後龜山天皇弘和二年、病んで卒した。正成・正行・正儀を世に楠氏三代といふ。

○人偏をはなれ正儀内裏守護　群燕

——儀の字のイを離れて、卽ち義によつて。

○正儀の世は冬枯に殘る菊　新編柳樽二〇

○楠も末世へ出ては齒がたゝず　万句合寶暦一三・禮

○三楠の弓四朝の君を補佐　柳多留八九

——後醍醐・後村上・長慶・後龜山の四朝。

○末世にかほる楠氏三代　誹諧獨二一

元中九年、尊氏の孫義滿は吉野に使を遣はして、切に後龜山天皇の遷幸を請ひ奉つた。天皇は、猶も戰亂續いて民の苦を重ねん事を憫み給ひ、その請を容れて京都に還幸せられ、御父子の體を以て神器を後小松天皇に授け給うた。後醍醐天皇吉野に潛幸ましましてより茲に五十七年、海内は再び統一の世となつたのである。

○湊川是ぞ楠家の夢の跡　柳多留　九〇
——「南柯夢」を利かせたるもの。

○撫子に楠の露おく湊川　新編柳樽三〇

○槍伏せて涙手向ける湊川　群燕

○感ぜぬ者こそ無かりけり湊川　川傍柳五

○吉野淋しく夢はちり楠は枯れ　柳多留一六七
——夢は、夢見草。

○歌書は花軍書は楠を譽めた山　同一四六
——「歌書よりも軍書にかなし吉野山」支考。

○花の山櫓の跡へ塔を立て　同一一

○南朝の跡にも王の夢見草　同七八
——夢見草は、櫻の異名。

本書に屢〻引用した『太平記』は、後醍醐天皇御治世の始より後村上天皇正平二十二年に至る、凡そ五十年の間の戰亂を記した書である。これを稗史小說の類なりと云ふ史家もあり、肯定すべき史實とする論者もあるが、何れにしてもこの五十年間の推移を知る貴重な文獻で、行文流麗絢爛、上下の愛讀する所となり、『大日本史』『日本外史』等にも譯載せられてゐる。此書に依つてはじめて楠公の忠烈は傳はり、國民に勤皇の思想と國體の觀念を刻みつけて、明治維新の大業の大きな原動力となつたものである。

○楠をもう五六册生かしたい　万句合明和二・松一
——『太平記』全四十卷、「正成兄弟討死の事」は卷十六に記されてゐる。

○楠の智恵も寢てゐる袋棚　柳多留　七四
——袋棚に書物を藏ふ。

○留守たのむ人へ枕と太平記　同一
正儀の事附り太平記の事

○太平記元が女の口ひとつ　一三四

——正中の變、土岐頼員の妻の口より謀洩る。

○見るやうに咄して聞かす太平記　同　二

——江戸時代の初期に、「太平記讀み」といふ者が行はれた。今の講談師の濫觴である。以下五句は、その講釋師を云つたものである。

○楠が御目見得をする講釋場　誹諧日本國

○前座には修羅場後座には太平記　誹諧寄太鼓

○釣堀を四五日つなぐ講釋師　柳多留一四三

○未來記は明日と講師の謀事　同　一三三

○屎の側辻講釋の千早攻　同　八一

——街頭の講釋。　同　一二六

湊川建碑の事幷ニ湊川神社創建の事

攝州湊川なる楠氏一族討死の跡は空しく荊棘の裡に埋れてゐたが、歿後三百年を經て寛永年中に、攝州尼ヶ崎城主青山大膳亮幸利は、竊に楠公瘞骨の塚と云はれる一封土に梅松の二株を植ゑて墓印とし、側に五輪塔を建てて忠魂を弔つた。

次いで水戸の德川光圀は、家臣佐々助三郎を遣はして、梅松の塚を改めて碑石を建てた。碑面には光圀自ら筆を揮つて「嗚呼忠臣楠子之墓」と題し、碑背には碑文に代へて明の遺臣朱舜水が楠公訣兒之圖に賛せる文を勒した。元祿五

年十二月建碑成る、今を去る二百四十數年、爾來一片の碑石は巍然として、尊皇の志氣を振興する基となつたのである。

○南無に增す回向は嗚呼の御ン言葉　新編柳樽二五

○御言葉の嗚呼は濁らぬ湊川　柳多留一二一

○御言葉の末世に朽ちぬ湊川　同　六三

○嗚呼譽れ湊に殘る御ン言葉　同六一、同六九

○湊川御譽言葉も七字也　同　六六

——「之」字を拔けば七字。

○嗚呼の碑は建てし賢者の名も不レ朽　差柳

——碑文の最後光圀の附記に「以垂ニ不朽一」とある。

○西山の水に洗つた楠氏の碑　——（慶應二）

——光圀退隱して後ち自ら西山樵夫と稱す。

○楠氏の墓へ西山の影覆ひ　舞扇句合

○築島のあたり西山ぢろ〳〵見　入船狂句合

——兵庫築島を築きし平清盛の横暴を憤つて。水戸黃門光圀卿、助さン格さンの二人を連れて諸國漫遊の途次此地に來り、自ら硬骨の一石工を督してこの建碑ありし也と、講釋師は事面白く辯じる。

○楠を石になさつてア、と譽め　柳多留　七一

——樟樹化して石と成ると云ふ說。

○楠は嗚呼の御意にて石に成り　同　四九

○楠へ嗚呼の御聲で猶朽ちず　同　五五

○楠を腐らぬやうに譽め給ひ　万句合天明四・禮一

○英名は土に歸らぬ嗚呼の墓　新編柳樽一一

○木は石に武名を殘す湊川　柳多留六一・同九四

○烏も嗚呼と啼いて立つ楠氏の碑　しげり柳

○湊川心ある士の袖は濡れ　一三八　新編柳樽二四

○楠を見にくたびれ足の泣き男　柳多留一二六

——旅人碑前に泣く。

○嗚呼の碑に感涙左兵衛程こぼし　同　一三七

○楠公の湊川跡皆左兵衛　新編柳樽八

——見る者皆泣く。

○湊川杉本ならばハァの二字　東宰府天満宮額

○稱へし徳を萬代の碑の靈龜　しげり柳

○兵家の仙も龜の脊に乘る石碑　入船狂句合

——碑石は青和泉石にて高三尺九寸幅一尺六寸厚一尺五寸、石川石の幅二尺長三尺の龜趺の上に載せ、二段高七尺の御影石の壇上に建てられてゐる

○我朝の湊川にも墮涙の碑　柳多留一〇〇、同一一三

——墮涙碑、晋の羊祜、襄陽に死す、其徳を慕ひて襄陽の百姓が峴山に建てたる碑は、是を望む者流涕せざるなしといふ。

○とてもなら芝にも欲しき嗚呼の御意　同　九八

——江戸芝泉岳寺。以下同様。

○願はくは義士の墳墓に嗚呼の二字　同　一二二

○大石の碑にも据ゑたき嗚呼の文字　同　一二八

○是も嗚呼名も高輪に朽ちぬ忠　同　一四一

○楠に似て高輪の石になり　柳多留拾遺五

○楠の後に忠義の石二つ　柳多留一五四

——大石父子。

○楠が成つたのだなァ大石に　同　一二四

——楠老いて石に化すの説。

○忠臣は初手楠で後チは石　同　二四
○智恵も忠義も楠の後チは石　同　八七
○楠の門出て大石に名を殘し　同　九五
○嗚呼不忠九太夫殿は石に成り　同　九九

――『忠臣藏』七段目茶屋場。

○楠石を論ずる坊主大我慢　柳筥　二

――淨土宗の僧釋大我なる者、寶暦十一年に『楠石論』なる一篇を著して、楠木正成・大石良雄を忠臣義士に非ずと論難した。その說く所は、儒學を本とし經典を照覽して楠公に十三の非を數へ、己を潔くしてその君の前途を思はず討死せりと難じ、或は正成河内に遁れて百歲の壽を保ち、その九十七歲の時の寫經が觀心寺に傳はるなどゝ、珍說を述べてゐる。恰も、後ち明治初年、福澤某が『學問のすゝめ』といへる著書の中で、この忠臣義士の死を下僕權助の首縊に比したのと同じき偏痴奇論である。

維新の大業成つて楠公が「七世滅賊」の遺志初めて遂げらるゝや、明治大帝御卽位後間もなく、明治元年、次の如き高札が湊川碑畔に立てられた。

大政更始之折柄表忠之盛典被ㇾ爲ㇾ行天下之忠臣孝子ヲ勸奬被ㇾ遊候ニ付而ハ楠贈正三位中將正成精忠節義其功烈萬世ニ輝キ眞ニ千歲之一人臣子之龜鑑ニ候故今般神號ヲ追諡シ社壇造營被ㇾ遊度思食ニ候依ㇾ之金千兩御寄附被ㇾ爲ㇾ在候事

但正行以下一族之者等鞠躬盡力其功勞不ㇾ少段追賞被ㇾ遊合祀可ㇾ有ㇾ之旨被ニ仰出ㇾ候事

四月三日　太政官

鄕民は歡喜して財を寄せ勇躍夫役に從つて、明治五年五月社殿は落成し、社號を湊川神社と賜はつて、別格官幣社に列せられた。これ人臣殊勳の遺靈を別格官幣社に奉祀せられし嚆矢である。次いで明治十三年七月二十一日、畏くも大帝の御臨幸を仰ぎ、同日英靈に正一位を追賜された。

今や國家非常を叫ばるゝの時、昭和十年五月二十五日を期して、大楠公六百年大祭が擧行せられる。感激の更に新たなるを禁じ得ざるものである。

○古戰場極メのついた湊川　梅柳　一四
○草ひとつなき楠が墓　誹諧種卸二〇
○且つ稱し且つ嗟嘆する湊川　柳多留一二八
○楠氏三代魂は石　誹諧鶴　二五
○湊川眞ッ直ぐに行く道しるべ　梅柳　二四
○嗚呼拜さばや播磨路の墓　歌羅衣　二

（昭和十年三月廿七日稿）

川柳楠公記　畢

昭和十六年十二月十二日印刷
昭和十六年十二月十五日發行

川柳楠公記　㊞定價金貳圓

著者　東京市京橋區新富町三ノ七　母袋未知庵
發行者　東京市麹町區麹町三ノ十二　齋藤昌三
印刷者　東京市京橋區新富町三ノ七　東水印刷所
發行所　書物展望社　會員番號一二〇五四　振替東京六〇八〇八　電話築地〇八九七
配給元　日本出版配給株式會社

終

書物展望社版